川柳杨



No. 655

十二月号

JII 協 加 盟

숲 日 、82年新春おめでとう会 場 時 大 昭和57年 成 閣 1 月 15日 午後 一時開会 祭

大阪市南区大宝寺町中之町26 心斎橋大丸とそごうの間を東へ約百 06 2 7 1 村 5230 4 庵

あたたかいご家庭へ、あたたかいおみやげ



懇親宴

会

費

五千円

◆同人、誌友の皆さん、ふるってご参加下さい。

III

柳

塔

社

挨

兼

題 拶

橋 紅

豚饅

焼売





(支店・出張店)

梅田阪神百貨店 なんば高島屋 心斎橋そごう なんば新川店・新川売店 ドージマ地下支店 ミナミ 地下虹のまち鹿鳴 京阪ショッピングモール 淀屋橋サン・ストア 南海難波駅構内店 近鉄百貨店(アベノ店・上本町店・奈良店・東大阪店)

海鼠と海月

踏まえて読んだものであろう。 尾頭のこころもとなき海鼠かな

水母は海鼠のように食べられないから残念水母ゆらゆら夜光虫のうたけ

はからずも水母の頭北を向き みずからを忘れしままに水母浮く 水母流れてふるさとを知らず

という句がある。召波の句は去来のこの句を と思うと嬉しくなった。 天外の着想が、二六○年前に詠まれているか 面に浮かんでいる海月に話しかけている奇想 い句がある。海の底を這うている海鼠が、 という、俳句とは思えぬ川柳味横溢した面白 海鼠は大好きだ。俳人黒柳召波の句に、 召波の師の去来の句に、 思ふこと言はぬさまなる海鼠かな 憂きことを海月に語る海鼠かな 海

作がある。

故堀口塊人さんの句に面

Ĥ

連

腸動物である。

姿を言い得て妙というべきである。

海鼠も面白いが海月(水母)も亦面白い

腔

味しい時季になったことを書いている。 性 0) 服 体 11 柳塔誌の十一月号に、好郎氏が海鼠の美 き 無 を 0 視 10 路 0 7 2 た 地 すい h ギ 0 時 を な ヤ 名 間 出 た ブ 7 を 0 を 7 樒 女 友 き 1 を 40 10 た 僕も ことをす 吐 别 武 起 か 10 3 家 n ある人と誰もが思う海鼠のあのグロテスクな という句もある。最初に海鼠を食べた勇気の た 11 屋 た 3 3 敷 7 1)

気

7

異

寸

頓

儿 尾

III 柳 塔 + 月



川柳塔 十二月号 目 次 題字・中島生々庵/表紙・直原玉青

秀句鑑賞 水煙抄 ■連載 川柳塔(同人吟) 義理と人情 海鼠と海月 ■川柳太平記 (43) 排風柳多留廿六篇研究 機械が秀句を憶える話〈1〉 水煙抄 同人吟 川柳界の題詠と景物主義 (四丁) …… 舟 ΙĒ 橘 若 東 九 西 香 本 高 木与根 尾 内 柳 野 JII 尾 薫風 水客 酔 選 花 選 八 選 錆 栞 4 1 44 2 47 25 30 28 26 4 42

義理と人情

香川酔々

るつもりではない。

るつもりではない。

るつもりではない。

行うべき道。②人が他に対し交際上のいろい とが多い一例なのである。あたかも「義理」 とが多い一例なのである。あたかも「義理」 と「人情」は、同意語みたいである。では念 と「人情」は、同意語みたいである。では念 と「人情」は、同意語みたいである。では念 と「人情」は、同意語みたいである。では念 と「人情」は、同意語みたいである。では念

意味。

▽広辞林△

義理=①人間として踏み行わな

ろな関係から務めねばならぬ道。

見てみよう。

▽広辞苑△ 人情=①自然に備わる人間の愛

	悔いもあり悔いなきもあり古稀の坂私の句	万葉の恋へ歯痒し羨まし			編集後記	各地柳壇〈佳句地10選・堀端三男選〉	本社十一月句会	柳界展望	大萬川柳「柱」	初歩教室	「 肩 」	一路集「景 品」	「限 度」	嗚呼 方大さん	吉田圭井堂氏を悼む
A			A		百卆	•			Jil	本	· 河	伏	白	藤	西
	中				酔々・鬼遊・史好・	:			村好郎	田	合	見	岩岩	井	尾
2	根	太	8		鬼游	:		i	好	恵二	茂	茂	文		伟
10	勇	太茂津	y	•	÷.	•			選	=	雄	美	衛	春	
N	太	\sim	奉		好好					朗	選	選	選	日	栞
B	A		7		:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:
G.		1	1		67	60	56	55	52	50	49	48	48	54	54

情。いつくしみ。なさけ。②入心の自然の動き。

り。情。
◇広辞林△ 人情=人間として、だれにでも

いのかも知れない。
「本音」とでも言えばよいのかも知れない。

は正しい用い方である。だから「義理と人情の板ばさみ」というの

江戸時代後期の小説本の一種に、人情本が

あるが、これは町人の恋愛生活を主とした人 が描いたのは、義理と人情の相克をきびしく が描いたのは、義理と人情の相克をきびしく とりだしたものである。 とりだしたものである。

『山路を登りながら、かう考へた。智に働けば角が立つ。情に棹させば流される。意地けば角が立つ。情に棹させば流される。意地い。住みにくさが高じると、安い所へ引き越したくなる。どこへ越しても住みにくいと悟したくなる。どこへ越しても住みにくいと悟したくなる。どこへ越してもはみにくいと悟いたとき、詩が生れて、画ができる。…』



え傾きすぎたままに 市 八 木 Ŧ. 代

香再蟋や

「蛭が胸」

を覗いてやりきれぬ

垣 史 好

谷

コスモ 嘘のな い秋に出 4 IÍI. から あ 節 1) 1 逢うた白 秋礼 0 の掌をおそれ い足袋

富田

林

市

岩

H

美

代

が覗くとコーヒー ぬるくなる

清水坂甘い記憶が落ちていた スモスが男のやさしい嘘を聞 だけ縮んで下の歯を抜 かれ 寝屋川

rhi

江

П

縮むだけ縮んで 賞め言葉 **人生の最後にジョーカー** 秋を編む指が冒険考える 目には目を倖せだんだん遠くなる 一つ息子が走り出す ならば許される

引かぬよう 島根県

研裁君の

修という名で昼の露天風呂 判官入廷スリッパはいたままの不幸は社内人事に詳しすぎ

栗ごはん積もる話を聞いてやり

わらかな心三日と続かない

会う

場所は少しキ

ザだが

伊 国屋 松原市 いつか逢う亡夫の若さへ老いお天心もうつしてみせる水たまり

つか逢う亡夫の若さへ老いおそれ

ト音記号安易な音は連れてない

|水を惜しまぬ貧しい午後だか||会の老いへ相手もふれて来ず

しい午後だから

堀 江

IF.

朗

度

尾

姿さえ見せず松食虫あばれ	指切りが判よりたしか子供達	知っているなら神さまよ言いなさい	今治市	九十だそうな畑に出るそうな	入賞にやがてとおもう句を讃え	佳作入選の横川秀峰氏に	引き続きその手で次は路郎賞	茗人賞受賞の林露杖氏に	生きていた斥候の肩鷲摑み	兵隊に花道はなし泥を匍い	大陸回想 (二句)	鳥取市	凶作と決ってからの秋日和	松茸は贈収賄になる値段	杜甫に非ず李白に非ず酔いつぶれ	体育の日を躍り出る車椅子・	楽天家にはかなわない十二月	青森市	孫なみにほめられて飲む風邪薬	指摘された癖はずかしい独りごと	意地悪は出来そうもない耳といる	白杖を芝生は音もなく許す	どに綺麗な正	停電で音半分の静かさに
			長									河						I.						
			野									村						藤						
			文									H						甲						
			庫									満						吉						
旅帰り馴れた枕をうれしがり	もの忘れ年寄りボケが進み秋	勿体ない余生感謝で老夫婦	正月が来る膝ぼんの水を抜く	東大阪市	しわくちゃの紙幣きらいな券売機	新米を送って呉れた亡妻の里	鉛筆をきっちり削る身障児	銭になる男の名刺もろておく	ランク付けさせた名刺を持つマダム	尼崎市	波に立つ男津軽の三味が好き	露はまだ花の心がつかめない	儲けみな注いでも足らぬ娘の舞台	行革へ顔が歪んでもどらない	ロハで呑む酒椅子が飛び首がとぶ	高槻市	腕組んで女は過去を喋らない	手ぬかりがあって可愛いい妻で居る	コスモスに埋れている待避線	叱られて叱って親と子の絆	雑兵がずらり工場の昼休み	今治市	の自慢水有り	せり市の伝票仲間には分り
				市						黒						若						月		
				場						Ш						柳						原		
				没个						柴						潮						宵		

花

明

香

ガイドブックにないふる里の祭り笛 対生りを供える妻のひとりごと 初生りを供える妻のひとりごと がんしょう 山田 前 田 前 田 田 前	水粉	狼の耳が噂を聞いていた 気の長い男にわさび効かさねば 一、二、三催眠術の目が覚める 一、二、三催眠術の目が覚める	待っている顔をしないが葬式屋 ウイスキーボンボン妻が酔うている 身勝手な男と思う秋ざくら なだちに負けるとママの恥になる	
水	翁	Q	遊	
土地成金日本列島せまくする	きじゃくっているのに記きじゃくっているのに記さまの戯れ癌を贔屓する	場入れる八十翁の背に悟り 間魔さまにはやれぬ目玉をアイバンク 間魔さまにはやれぬ目玉をアイバンク お宮市 大 矢 ラーメンの不味さチャルメラが下手だ	らみ百し蛉見の日かと	
雀	明	+		
年 踊 子	朗	郎	太茂津	素身郎

天上天下指して強制せぬ仏 好意もっているから沈黙まもっとく 好意もっているから沈黙まもっとく よい夢のつづきへ新聞入れる音 お身体に悪いと短気あやされる 倉吉市 どん底を生きた男の逞しさ 全金にボーナス欲しい十二月	章し戚あンと	鐘が甘いわたしを攻め 協したわたしに坐る梳 実はひとつ大地を踏み 粒の米に云いたいこと	遠縁と云うはしくれに住む他人町の噂いつも女は悪役で古い町古い人情をあたためる上役に負ける強さがほしくなる
奥	川 遠	嘉	
谷	Щ	数	
<i>51</i> ,	弘、可	兆代	
朗	生生生	賀	
できれの直感化びしき方に傾けり ライターの炎大きくして聴くゆとり 面白味のない人水割りしかいけず 歯しさを隠しきれない歯の白さ はだで心叩いてくれる夫 られで心叩いてくれる夫	がマンソンを奏でつづけている銀杏 がなまお前のようにまだなれぬ がな天王寺さんへの連れが出来 かな天王寺さんへの連れが出来 がな天王寺さんへの連れが出来 松江市 見ごたえを嚙みしめている秋日和	大阪市ではなる事に馴れてて疎まれる。 除になる事に馴れてて疎まれる。 とで育てばこんな子に育ち。 はなる事に馴れてで疎まれる。 とならさめる。	憂さ晴らしするお喋りがまだ続き 夕顔が咲いてくれたと拝む妻
堀	小	小	児
江	林	出	島
芳	孤呂	知	与呂
	52.		

直感で優勢と見た妥協案もうひとりの自分がほしい日の疲れもうひとりの自分がほしい日の疲れ神様でない人間ですで事がすみ	暦がすめば光陰矢の如し唇がすめば光陰矢の如し	ペッておこがましく 本田茂銅像除幕式 (九月 本田茂銅像除幕式 (九月	学歴社会規格人間製造所 学歴社会規格人間製造所 おたやんにつまり最後を看てもらいおたやんにつまり最後を看てもらいおけ合うて食べよが猫にわからない	がやえが んと
	占	高	白	金
	橋	橋	井	井
	千 万 子	操	三林	文
	子	子	坊	秋
コンパスの円より描くこと知らず悪友がひとりいるクーデター 島根県 島根県	見てしろうとの釘の数とのふたりになりましとのふたりになりましたのかになりましたのかになりました。	しげなる	会才原 か 鼻を突く 会才原 か 鼻を突く はって生きると隙が出 になれと個性を削らになれと個性を削らになれと個性を削らになれと個性を削らになれと個性を削らになれと個性を削らになれた。	舌世 胸を押しる た切りへ
7] x	玉	稻	安平	原
砂	置	田	次	
白	重	豊	弘.	独
汀	人	作	道	ſШ

万億止ひりつ 人祖 本 義 針失裏 夢 10 < 仕野カ 枯 着 追 ゴ金 かざっ 生 箱 返 つくし たびれたお 残 14 ンジザ いつ か 桁稼 木の た愛の 00 しを許さぬ席 を 0 + 1+ 0 場 底で秘 た孫 枚きれ 節 命 は 枕に長 無縁では 基準に出てゆく めて受け 1) 1) 地 老母 1 今日 と隣 て貧しき心ふれ は H H 苦 いでせまい 球 む Ct. 節に 痛 手 悟 J" 0 みの に文鳥 1) いな秋 丰 H 虚 0 密 高 札 も常連東大出 価 こだわる蝿たたき 10 1) は風 に妻が 夜 飾 財 0 0 な 切 は松茸たべ た傷なり 値 しがある 語 があり 12 を 子. 1) は 布 爪をきる 10 る裏 風に せまい なり 化 蛙の な MI 10 0) 0) 動 今がある 夜の別 居る する 祝いごと か 重 10 会う 7 表朝 無の な 盛 疼 步 0 U 血をも 視野 てはる 3 去 か H る 111 な th to 竹原市 大阪 西宮市 八尾 界 10 b ihi 市 63 宫 森 藤 中 # III 儿 村 蔷 弥 雀 居 女 4 赤とんぼ素敵し 銀行 還曆 寺や南建る瓜 窓 熱 不機嫌よいっそ爆発せんか 天 関 カラ 御 服を替えネクタイを替 法 トンネル 旅 おんなだから恐しい 枚の招待 7 建材 開 ランティ 0 先 所 0 ぶまであ せない 子. のその オ 月 17 から 裏 の義父の若さよ大声 あ 0 祭り ケの忘年会へ汗をかき おろろんおろろんするば てミサは流 ピラニアに似 依 īi 1) 1 を 待状 こおろぎよ鳴き続 じ家並み 1 願 思出 ア実は不肖 退 後 んなにうま Vi は 頃 いましては十二 をし がし < は と思う日 か 職 もあ つも h 鄉 聞 0) 妻 と喰 手: 0 0 がらみに th か 拾て台 街 る冬の て退 拔 子 1) な 82 UK 使 て文 の息子 え片思 ほう Ŧj. 1+ 0 が見てるから (10) 1.5 てきた平 詩 真 敗 職 ち朝 Va がよ 戦 17 16 金 U ·L 集 天 嗣 から 守居 るか な 記 財 10 UN 唐津 か 3 10 原 i) 和 ifi iti iti 小 新 舟 島 原 木

静

步

天子

5.

根

蘭

幸

スタートライン後へは引けぬ走るのみ 選みきった無垢の瞳を抱きしめる 一人ずつ話せばみんないい人で 蟻地獄うごめく蟻の一匹か 鳥取県 川	場心の視界に燃える彼岸花 鳥取県 鈴塚山の視界に燃える彼岸花 はあらず世相に負けただけ 一期一会心に残る人は逝き しんがった しんしゅう いっぱい しんしゅう しょう しょう しょう しょう しょう しょう しょう しょう しょう しょ	制の掟を笑う文珠堂 制の掟を笑う文珠堂 (大山) 大阪市 大阪市 大阪市 大阪市	対り終えた稲に夕陽も積んで押し が大打下壁にやもりも山の宿 を養に古稀とは長い渡り橋 が弾け が弾け が弾け
崎	木		松 久
77.50			家
秋	村誕	12.1	土 代 仕
女	子	史	的男
枯野見つめて野仏のよだれかけ 枯野見つめて野仏のよだれかけ 枯野見つめて野仏のよだれかけ	一日で終ってしまう農繁期 可シテンポ早く平次は銭を投げ ワンテンポ早く平次は銭を投げ 水やりの苦労結んだ菊の鉢 奈良市 奈良市	及うでは、 は は に の に 。 。 に 。 。 。 。 。 に 。 。 。 。 。 。 。 。 。 。 。 。 。	生きのびて欲は言うまい日々好日 生きのびて欲は言うまい日々好日 保護色に染って蛙よう跳ばず 素晴らしい朝を演出する妻で 伊丹市 一人やる妻の歌舞伎へ悔残る 伊丹市
542			
辻	宫	森	樫
		森田	樫谷
	宮		

受賞作家そんな視線へ伸び悩む が深い人をいじめて居る民話 が深い人をいじめて居る民話	下ぶくれこれで歯痛が無かったらお茶の間がLDになり冷えてくるお茶の間がLDになり冷えてくるお茶の間がLOになり冷えてくる	達覧が時のあやしさ告白したくなる 達うもよし別れるもよし京しぐれ 意識するポーズで泳ぐ錦鯉 哀しとも荷風の女の夕化粧 のなの夕化粧	酒断って猫に足音おぼえられ 黒板の隅に一字は妻のもの 様ボタンが無数身の毛だつ平和 疑いをもたぬ瞳なんて欺せない がりくりのスリル味わう夫婦箸 だっくりの御利益悔いはないやろか ぽっくりの御利益悔いはないやろか
林		福	浦若
		本	野 宮
刊	1	英	和武
枝	Ċ	子	子 雄
を建てて柱談義に花が咲き 家建てて柱談義に花が咲き 家建てて柱談義に花が咲き	切って楽しいゲームする社でなくても濁水飲みたがりでなくても濁水飲みたがり	娘みずみずしければ我が老い隅におく 保安帽亡父そっくりの被りぐせ 百歳のカルテも無常の風のすじ 大阪市 なぐさめはスターと同じ髪かたち なぐさめはスターと同じ髪かたち	無の境をさまよわせている秋夜長 相リンピックとられ借金ゆすられてやるからは省庁三つ四つ先ず切って であからは省庁三つ四つ先ず切って であからは省庁三つ四つ先ず切って であからは省庁三つ四つ先ず切って であからは省庁三つ四つ先ず切って 第田林市 シャッターの音が気になる夜明け前 シャッターの音が気になるで明け前
柴	西	津	和河
Ш	Ш	4.	田原
英壬子	幸	柳伸	維 久 子

を上手にあっても	釜めしに旅情ぬくもるひとり旅信じます信じていると云う不安に呼吸ひとつ優しい顔になる不替え四季を楽しむ母老いず	大阪市音立てて我が家出て行くめでたい荷すりこぎの丸さでゴマのいい匂い 後戻りすれば見つかる迷路でも 見る方はとても楽しい綱渡り 仏壇で生きのびていた秋の蚊よ	東大阪市 大田向猫に座がとん占領され 大田向猫に座がとん占領され 大田向猫に座がとん占領され 大田向猫に座がとん占領され 大田向猫に座がとん占領され	現場検証林は装い替えている変身へ高価は辞さぬ観音茶本屋へ心重ねた日の記録メロドラマハッピーエンドへ遠回り
室		本 神 夏	森	
谷		間磯	下	
徹		満 道津	爱	
舟		子 子	論	
限りある命と虫は今を鳴く 電話口ゆるされる嘘考える 越えられぬ越えてはならぬ 越って昨日の夢の続き	日曜も六時に目があくより見船太古のままの海(制服を脱げば疼いて来る乳房 距離おけば置いたで女淋しがり 色褪せても散らぬ造花に似た女 花も生け茶もたて浮気もする夫 花も生け茶もたて浮気もする夫	典が語る故人の色模 とがあり日の丸があ を抱く膝倖せな温か とでであり日の丸があ	順不同といいつつ順が、ええ格好するのに人に、酢わしたら百足どんな
した 学道 た	あくから口惜し れか汗を拭く	音 に似た女 に似た女 もする夫 豊中市	の 平と	が気にかかり が気にかかり
した 岸に佇つ	神惜く	るるたが房豊大女り	の 平 ヒ 客 和 ー の	気にかかり 駆を着せ 姫路
した 岸に佇つ L	神借く 一日 市	るをが房費市市	平和四山県	気にかかり 銀路市 が が が の の の の の の の の の の の の の
した 岸に行つ L	神一情に	るを女が房豊中市安	平和の客となる直	気にかかり 罪を着せ 姫路市 大

義母の死 (四句) 松原市	史をさ	土盛って少女小鳥の死を悼む	還らない島の真上の蒼い月	道連れになってはならぬ核の傘	ふるさとはダムの底なり秋ざくら	松江市	真っ蒼な海に答が秘めてある	なお慕い樹海にまぎれて見たくなり	温情を背に溜めたまま深い秋	握手した温みへ揺れる黒髪よ	優しさが怖い気ままをなぜ許す	和歌山市	欲心が両手に余りこぼれ落ち	ローソクの灯が聞いている寡婦の愚痴	ローソクのようにわたしも燃えつきる	かがり火が燃えて悲しい鵜のさだめ	便箋の余白に本音書いてある	堺市	お茶に呼ぶ銀木犀の垣根越し	芋少し背戸に置いとく仲直り	留守の土間鯖を伏せとく洗面器	稲刈りの畦に魚屋鯖を提げ	先代の希い空しく松が枯れ	島根県
北						梅						松						大						角
野						本						原						道						
久						登美						寿						美ス						耕
子						夫也						子						美乙女						草
コーチが握れば車素直なり 孫の智恵又一つ増え二つ増え	大正も老人会ではかしこまり	東早	リュック一つ引揚時の時雨道	おえつまだ続いて別れの薄化粧	今日の日を妻に感謝の目がうるみ	一徹が厳しく生きる彫刻刀	柳井	坂道で忘れた櫛と母の糸	坂道で捨てた男の白日夢	坂道の途中で出逢う刺客たち	柿の種坂道コロコロ逢いに来る	坂道よ長いはなしを盗み聞く	富田林市	あの女の残像がある紅芙蓉	ウエストの脂肪が妻の座に甘え	飲めるうち飲んでおきなと河童の絵	巨竜にもポパイにも似て雲がゆく	土足のまま上るが如きインタビュー	西宮市	不意に出た蜘蛛が夫婦を和解させ	一番頼っていたのは義母の耳	義母の死が素直な妻にしてくれる	ネックレスで飾り御詠歌上げに来る	お迎へが近い美しい顔をして
		īħi					市						111			There			111				9	
		巾原					市弘、						板			7124			杉				ବ	
													7,8.3			7024							ଚ	
		原					弘、						板			7124			杉				ଚ	

色直し長過ぎカラオケまだ続き	ではずくと皆に踏まれる下り坂囃されて恰好つけて金が要り給料を運んでいるのに粗大ゴミ		さしている僕も骨一本折れた傘	喪服着ると余計明るくなる娘	おみくじで足りず参道の易に立ち	車車香る間もなし金木犀	京都市	これしきの事につまずく足の老い	うたた寝が鼾に変わる農繁期	老いの身へたよってくれるのが嬉し	四季感が失せた仏の花を買う	島根県	値切るだけ値切り月賦の判を押す	釘一本さして手応え確かめる	手応えのないまま北方呼びつづけ	逃げ道を持たぬ捨身で振り向かず	鳥取市	カレンダーボーナス出る日をチェックする	菊日和約手の期日やっと過ぎ	お料理の匂いに猫は思案変え	借りものの身体に似合う貸衣裳	大阪市	竹割った気前の男にゼニがなし
		十村					都					西					小	る				西本	
							倉					村					林					森	
		ゆきを					求					早					由多香					花	
		を					芽					苗					香					村	
今治市	価値観の調整役が回って来赤字線消える旅情を懐しみる耐が身につきました四面楚歌	カーフェイス腹の中で	大阪市	断絶の俺には四人の子が味方	五ツ児も肥れ自衛隊も肥れ	天高くじっとしとれず車椅子	台風は東五輪は西に逃げ	下関市	あなたの指図受けませんと女拗ね	私の返事よと部屋の鍵をくれ	固唾飲んで次の言葉を待っている	老いの耳感度不良を訴える	大阪市	コンバインの音へ豊作吸いとられ	スムースに話がきまるレモンテー	男だった嬉しさ名付けにも迷い	昔気質の職人が居て茶をすすり	松江市	鬼面とて馴染めば主の芸に生き	夫々に耐えて来ました夫婦箸	梵鐘の余韻の中に亡母の声	辻褄を合わして呉れる飲み仲間	大田市
越			河					玉					西					恒					藤
智			井					弘					Ш					松					田
-			庸					#					善					叮					軒
水			佑					休門					紫					紅					太楼

双方の靴がちびてた履き違い 逆修として法号を援けられ 岐れ路妻も後からついてくる 時の屋根雀は何を話してる 倉敷市	いい月夜無性に娘に逢いとうて家族の真中にいつも母が居る家族の真中にいつも母が居る	息根県 を仕度終えて息つく秋日和 は三つ我が家の柿の出来 を仕度終えて息つく秋日和 島根県	かけひ水静かな秋のたたずまい 小の絵ぶつける彩に満たされる 小の絵ぶつける彩に満たされる を基本で達えて嬉しい祭り客	いっそ灯をおろして秋を親しめりお見舞のついでに別な用もたし指導権初老の妻にまかせきり高原のコスモス雲の峰へゆれ
小松		錦榊	栂	:
幡本		織原		
里忠		文 秀	<i>z</i> ,	
風		子 子	<u>ک</u> ۱)	
で がけ落ちの米びつ空を気にしてず がけ落ちの米びつ空を気にしてず 量後晴嫁の座はたしか 松江市 下手物が好きな女神だっている からながたまると鈍る	まされて結局倖せです女隣りも同じ野球のページ見うて来たコケシに歴史つい	美しく出合いみにくい別れなり 美しく出合いみにくい別れなり 美しく出合いみにくい別れなり 美しく出合いみにくい別れなり	でもはじまらでは淋しいぞ	離置いて人妻と行く秋を捨てた縫い目も見せ
柳	天	飯	古	時
楽	正	田	谷	広
鹤	千	悦	節	

夫

路

郎

丸

梢

半世紀生きても人間未完成 平世紀生きても人間未完成 羽曳野市 塩 満 敏 半世紀生きても人間未完成 羽曳野市 塩 満 い 二重丸これが母ちゃんの顔ですか 塩 満 い 一	知れぬ 藤田 頂留	倦怠期夫婦の鎖のびたまま 職安の窓で男が売れ残り 思い出をたぐる片道切符買う 思い出をたぐる片道切符買う 鳥取市 両 川 洋 々	則の秋の虫に聞き ペルスメーターの罪ならず マルスメーターの罪ならず 泉八雲旧宅	出雲大社 貴重な体験履歴書には書けぬ 神戸市 仲 どんたく ナウに見えるブチックの女店員
おごる鼻おごる目を持つ花園でおごる鼻おごる目を持つ花園でおうないけれどさし向かいまうこそと能登金剛の波の花草 深立ち呑みへ一つ手前の駅で降り 草 深	こ文判役に立っている車検 岡山市 川 端 別越しへ大事に漬物石も積む 大付けても片付けても孫二人	年越しの策ないらしい飲みっぷり 野闘賞あたりで暮れる除夜の鐘露ほどは疑われてる丁重さ これ とせば合わず掛ければ合ってくる二人	は場に立って男の値が決り とそいて皆から愛されよう とく老いて皆から愛されよう との愛情は科学かも知れぬ	行革の衣の下にヨロイ見え一歩一歩リハビリの足よみがえる子算みな軍備にほしい軍鶏の国
西华	柳	秋		李
升	子	月	灯	3

では、 でも近道させたい親心 会えるかもしれぬこの道まわり道 会しでも近道させたい親心 東大阪市 西陣ネクタイ買気をそそる京訛 手燈供養母のおもかげ灯もゆれる ともしびもゆれてる飯場の将棋盤	別を信じる善人の神参 間を信じる善人の神参 で見ただけ で見ただけ で見ただけ で見ただけ でえは旅の本見て旅を なえは旅の本見て旅を	でもう出来ぬ齢だがさるのまなざし遺影は時みのまなざし遺影は時みのまなざし遺影は時みのまなざし遺影は時みのまなさとみず子地蔵の乱れヘテレビも咎めの乱れヘテレビも咎めの乱れヘテレビも咎めの乱れヘテレビも
奥	崎 竹	斉 土
т	山 中	藤岐
弥 山	美 綾	三十り
χ̈́	子 珠	四 子
再会の名残を惜しむ萩の道 木の葉髪乙女にかえり夜が更ける 木の葉髪乙女にかえり夜が更ける 電光ニュース世界がゆれる文字流れ 電光ニュース世界がゆれる文字流れ 場へ向けて何回目かの糸通す 米子市	乗書の範囲か見せ場 の手を飾って奥様日 となく浮気そこ迄来 下リカーテン引くか 人の妻子は六法に守	げ石の波紋も父子から 人の目日々好日のよう 会の折りをもらって異 会の折りをもらって異 性でないとは癌でない 性でないとは癌でない 性でないとは癌でない 性でないとは癌でない 性でないとは癌でない ため間に亡母の仕草を らぬ間に亡母の仕草を らぬ間に亡母の仕草を
石	雑 政	桑
垣	賀	原西
-++-	M.	The state of the s
花	美 日 枝	伊雄

愛想のよいこと少し痩せたという心底から笑える妻の病癒え心底から笑える妻の病癒え	女ひとり意地張って住む路地の菊風むきへ母がひっそり席を立ちへけがひっそり席を立ちでがて我も入る墓石や蟬時雨でがて我も入る墓石や蟬時雨のかで、	・ 大阪市 が家だけ旗掲げていた体育日 我が家だけ旗掲げていた体育日 をしても横文字読まされる	要の窓も日毎明るい色戻る 家計簿を捨てぬわたしの歴史かも 家計簿を捨てぬわたしの歴史かも	老父の歩に合わせ田圃を見て廻り でランダに老母の手順で梅を干し でランダに老母の手順で梅を干し がら人生夢を盛る
Щ		黒	横	青 菅
村		田	地	戸 井
映		真	雅	田と
輝		砂	風	田 も 子
核心に触れず和解にこぎつける 野良猫は追われて後を振り返る 歌時の砂丘童心走り出す	人間のエゴだと並ぶ菊花展が海に果てには和さん岩清水大海に果てには和さん岩清水大海に果てには和さん岩清水	真っ直に歩いているからぶっつかりベテランの失敗人間らしくなりベテランの失敗人間らしくなりがみ味覚の秋僧む	ススキ野に佇てば若い日のロマンムの音を遠くふとんに身を埋め虫の音を遠くふとんに身を埋めまでいると白髪の泣き笑いる。	倉吉市 を を れ は を は を は り と い る は り と い る と い る と い る と い る と り る る る る る く り と り る る く り る と り る る る る る る る る る る る る る る る る
金	清	岸		有 渡
)1[水	本		田辺
満	_	無	į	と 菩
春	保		Į,	とし江 若 句

死神をにらみつけつつ父看とる	父没す	廃船へ母なる海の子守り唄	若者の血潮まつりへぶっつける	母と娘の話へ父も入りたがり	岸和田市	石沈む波紋の結果知らぬまま	勇み足気付いた時は沼の中	矢印の通りに歩む父律義	人事移動今日一日を無口にす	岸和田市	悪友の絆が深く五十年	十五夜へ昔の恋は甘かった	早朝の電話やっぱりよい知らせ	運勢欄心引かれて今日も読む	岸和田市	資源ない国と言ふのに粗大ゴミ	蟻の列どんくさいのが矢張りいる	虫の音が冴えて耳なり遠くする	性哀し女大罪犯すはめ	岸和田市	嘘に嘘重ねて女嘘に酔う	落魄の身を寄す故郷の夕霞	善人の素顔はどこか頼りなく	雁来紅何故に燃ゆるか計が届き	鳥取県
					島					狭					福					古					林
					崎					間					島					野					
					富志					希久					せつ					U					香路
					志子					久志					つ子					T					杖
京都市	年もここで炎えます曼珠沙	七十五日他人の事なら忘れられ	魚屋のおばさん筆算で釣をくれ	浮き雲の白さに旅を誘われる	松山市	角かくしやはり隠していたと知る	夕暮れを無事に帰ったヘルメット	医者の子とも言えず悪口聞いている	十二月反旗持つ手が重くなる	海南市	善男になれるか四国に杖を曳く	遮断機が降りて決意をにぶらせる	子も成長呉れと言わずに貸せと言う	雨音を聞き落付く日慌てる日	守口市	地車の今年も載った事故の記事	見送りをうながす孫のランドセル	野火の如燃え広がって曼珠沙華	十五夜の童話を孫に否定され	阜和田市	食べ初めの蛸は可愛く座らされ	年頃の子を持つ親の低い腰	十五夜の夢ロケットが持っていき	今も猶蛸の伝説持つ郷土	岸和田市
Ш					谷					4					野					清					原
本										尾					呂					野					
規					真					緑					右					-)					さよ子
不風					風					楼					近					う					子

ソ連とは苦い思いのおつき合い が高を歩けば文人めいてくる 鎌倉を歩けば文人めいてくる が高を歩けば文人めいてくる が高を歩けば文人めいてくる	団欒の湯気はローンを忘れてる知り過ぎたばかりに口を封じられ知り過ぎたばかりに口を封じられ定年の足に落葉がまといつく	日がおだやか過ぎて恐くなり年振り涙先立つなつかしさ法事へ無地の着物のしつけ取るばやと目覚めて朝刊待ちかねるほかと目覚めて朝刊待ちかねる	流れ星まだまだ欲な願い事 一番も雨も忘れたバスの中 まも雨も忘れたバスの中 三重県	十一月表紙の秋は愁色で先の先読んでる人が読まれてる住年の校医来賓席から遠くいる熟年の抗議気軽にあしらわれ
岡戸村	岩	行	坪	
H & T	. #	天	H	
拳 春	本	千	冬	
法	<u></u> 棒	代	花	
重なの要る話とな 金の要る話とな 金の要る話とな	血管線 佳人も見 ロケットが着く 共学を女性課長	年犯のボ	早退に言訳: すれやこれ	国守る気概なけ
要る話となってみな黙るのご奉公年金加増されったか素足へ秋の蟻が嚙みの雄のさだめに似た末路ランと呼ばれるだけで空しい日ランと呼ばれるだけで空しい日出雲市ぬいて今日は追われる浮き沈み	んと歳せてかりて	(イルよと萩を切る(イルよと萩を切る(イルよと萩を切る	をいう実直とかべって	概なければ侮られ れば侮られ 和泉市
金加増されるだけで空れるだけで空れるだけで空れるだけで空れるがけで空れる浮される浮される浮き	岡る山	萩を切る 町田市	大阪をいう実直さをすねているとは見えをすねているとは見えるとは見える。	れば侮られ てだけおれず れば侮られ 和
金加増され へ秋の蟻が嚙み のに似た末路 れるだけで空しい日 出雲市 は追われる浮き沈み	岡 山 市	萩を切る 町田市	をいう実直さ をすねているとは見えず となべって可愛いく女居る しゃべっま直さ	れば侮られ てだけおれず 和泉市
金加増され 金加増され へ秋の蟻が嚙み へ秋の蟻が嚙み 出雲市 板 出雲市 板	岡山市	でいる労組 でいる労組 でいる労組	をいう実直さ をすねているとは見えず となべって可愛いく女居る しゃべっま直さ	れば侮られ てだけおれず アメリカ悔んどる

	雑踏で昔の彼とすれちがい 大阪市 い	無医村に年配の医者迎えられ	犬吠えて困り吠えぬでも困り	ダイヤ婚ダイヤが指に用がなし	自动相关目示	植物に近いがまだくくいて欲しく	長闘病の父	大型車買うて隣りの塀が邪魔	体育の日だけでめりめり軋む骨	殿に叱られそうリフトでの登城	松山城にて(一句)	宇部市	露地を曲るとわが家の笑い声	愛染の色もあせて夫婦箸	童顔の老父は弥陀に近い顔	善人で無くちの夫が皿洗う	出雲市	ジャンケンに弱い女で嫁き遅れ	秋風の向うに自画像落ちてゐた	雨の日の模索女の爪が伸び	よく笑う友だちと居て花を買う	出雲市	何するか知れぬ臆病を猫恐れ	一等にどの子もなる気スタート線	
	丏.				太							平					古田					園			
į	出				田							田					岡					Ш			
ŧ	捯				亀							実					きみえ					多賀子			
2	泉				甲							男					ż					子			
云わんくせに小言を練	ライバルが呉れた真赤なバラの花和歌山市	雑踏の駅で奇遇の手の温み	失言にその真実がこぼれてる	人生は未完成のままつづく	栄転の椅子で兜を締め直す	和歌山市	子や孫の愛も鎖と思う日も	悪友が居て宴席に落ち着ける	赤トンボ追う道草は許される	意識した日から才女に幸薄く	和歌山市	オリオンの星見るまでの長い道	歿くなったそうですご親切なお方	亡き父を庇い兄弟愛を燃やす	釘打てて初めて母はほめました	京都市	張り込んだ土産に旅を疑われ	追伸でやっとさわりが読めてくる	塞翁が馬博打に負けている	おずおずと押してる指とわかる音	羽曳野市	大阪弁変なドラマで溶けこめず	四捨五入して幸せと思っとく	チャームポイント眼鏡はかけずおく	
	坂					内					垂					Ш					榎				
	П					芝					井					本					本				
	公					登.					T					桐					吐				
	子	ej.				登志代	65				寿子					下					来				

信じてたコンピューターに裏切られ 名優の素顔苦労の皺の数 極楽行って息抜きすると母 極楽行って息抜きすると母 を楽行って息抜きすると母 大方市 古木にも新芽汐時考える をしてたコンピューターに裏切られ を楽行って息抜きすると母 を楽行って息抜きすると母 を楽行って息抜きすると母	子想表だけポケットに残っている師走 長寿国日本百まで生きるよくがでる 長が子が今頃やってきた初秋 でるまで生きるよくがでる	時代劇電柱一本邪魔になり団地の窓小菊一鉢咲いただけ団地の窓小菊一鉢咲いただけ西欧の菊はあれども匂いなし西欧の菊はあれども匂いなし	親の云う人と結ばれ墓参り 風呂敷を母の教えの結び方 風呂敷を母の教えの結び方	次る
水 松	欄	稲	木	3
野高		葉	В	H
秀		星),	
弘峰	蘭	4	利	恵
びへ僕の花環の位置がない 違反金払い巡査に労わられ 違反金払い巡査に労わられ を とんぼ私の声はとどかない 青森県 日さんも一と役買った新学期 日さんも一と役買った新学期 日本人も一と役買った新学期 日本人も一と役買った新学期 日本人も一と役買った新学期	を広と人	東唄と暮しは別な千鳥足 中度だけなら騙されてやる金を貸し 一度だけなら騙されてやる金を貸し	される時間は長い五分とれる時間は長い五分とかりの荷仕上がって	
五十	荻	清	野	≕.
嵐	野	水	呂	宅
操	鮫虎	健	鵜	3

空しさはさわいだ後の一人の灯空しさはさわいだ後の一人の灯明のない田植老父に物足らず明のない田植老父に物足らず	同じみち歩んできたに子を叱る脳細胞朝のコーヒーで整える	せてダイヤチもも考えもん	水平線丸い地球へ逆らわず生き残る苦労をカマキリ身で教え生き残る苦労をカマキリ身で教え千年の歴史へ山の無表情河内長野市	厚化粧あせる心を塗り込める お前なら出来るとつまらぬ役がくる お前なら出来るとつまらぬ役がくる 正直に生きてくだけのむずかしさ 三重県	この街の民話を愛し一人旅平手打ちされて夫婦にある絆要領がよくて孤独な日を重ね要領がよくて孤独な日を重ねまれ違いふとよみがえる過去の人
中	赤	松	井	111	藤
村]1[活	上	上	後
	菊	三	喜	溪	実
優	野	吉	西华	水	男
二十一階に泊った夜は眠られず二十一階に泊った夜は眠られず大阪市	返り血を流す雨なら降るがよい咳ばらい言い訳の態勢整えるいつ迄も働く定めかはぐれ鳥	明ハーサル無しに親子の運動会 リハーサル無しに親子の運動会 松江市	折り曲げた紙にも習性戻らない不職で寒暑の職場を堪え忍ぶ	成里くて	夢の夢内緒にしとく宝くじ 宮仕え平穏無事で胃が重い 宮仕え平穏無事で胃が重い
石 岡]	竹	岩	神	村
倉 田	I	内	道	田	Щ
芙 佐		寿	博	秀	光
子。	*	美	友	山夆	輪

横文字で書かれてカルテ生きてくる 茶の心それは愛だと知るや君 長所だけ盗んでくれと親のエゴ をないまで書きつけたらしい仲 は深ばず砂時計が嗤う	びっこにしぐれ疳に来たピアノやくざの啖呵 理論はもっている 半争の歴史 光年の昔から エロー の	背のびしたつもりへ空がまだ高い 勝ってから言える無欲に嘘がある だしになる魚もあって味丸い 鳥取市	ない 増 に 女が に 真が
正		尼森	木
本 田	I	田	村
水	Ţ	緑熊	1,5
客 朗	j	之 助 生	じめ
横顔を見せて嫌いな人となるひとり言から独り酒燗をするいとり言から独り酒燗をするがよい	生だと思えば不足のないもかも薄味でよし老いの省の中で育ってゆく愛か	もう一度会いたい人がひとりあり はかい布衣の変り二十年 は伸二行本音を窺わせ は伸二行本音を窺わせ	安土水郷 水路縦横 葭に視界を変えられる 水の照り舳先の波紋が生きてくる 安土遠望よしきりの声もせず 安土遠望よしきりの声もせず
	浜	111	若る
	田	村	本
	久米	好	多久志
	雄	郎	志



本人が来たのに判がちがいます

くらでも押してやると言って突きはなされた 生の印を押して下さいと言われた時先生は、 その方は先生の路郎とサインをされた下に先 出の判でない限りはみとめてくれない。判と 金融機関がそうである。判がちがっていれば ことがある が彫るものだ、それほど判が欲しいのならい サインほどたしかなものはない、判こは判屋 いうと路郎先生が或る方に揮毫をされた時、 いくら本人だと言い張っても駄目である。届 はないのだろうか。銀行、郵便局等あらゆる 何でも彼でも判、判と言うのは日本だけで

自転車のしつけを市長考える

転車の行儀も良くなって来ていることは嬉し いことである。たしかに市長さんのしつけが 最近各駅で洪水のように放置されていた自

> 良かったのであろう。しつけとは川柳家らし い。次に来る空罐条例もこうあって欲しい。

釈尊の死んだ姿で昼寝する

る作者の句を思い合せる時、 ちんまりと柩に入り易く老い、と詠まれてい が作者の心であり姿でもあると思う。 入滅されたと言うお釈迦さまの寝姿そのもの 感じずには居られない。一切の煩悩から解脱 昼寝をして居られる姿が眼に浮んで来る。 一抹の淋しさを

下駄履けば土が生きてる秋の音

くて走りまわった子供の頃が此の句の中に思 聞えて来る。新しく買って貰った下駄が嬉し い出されて来て楽しい。 柿の実が色づいて、鎮守の森から祭太鼓が

聞き捨てにできぬ悩みを背負わされ

聞き捨てにできぬ悩みとは、どのような悩み きてゆけないのが人間なのかも知れない。 だろうか。自分の知らないところで聞き捨て でも聞き捨てにしなければ大きな輪の中で生 にできない噂が流れていることだってある。 いろいろな悩みを持って人は生きている。

完成へ小さいネジが見つからぬ

る。人間の場合一、二本足りない方が私なぞ なければそれは完成品とは言えない。小ネジ つながらないともかぎらない大切なネジであ つで時計が動かなかったり、小さい事故に ピンセットで摘むようなビス一つでも足り

にはお付合いがしやすいんですが

だ。七人の敵を向うにまわしての気構えが靴 向いて揃えられている家庭が眼に見えるよう にも人にもにじみ出ていて頼もしい句。 玄関の靴は明日へ向けてある 美しく磨きあげられた靴がきちんと明日へ 雷も派手に暑さの抜ける雨

ように青空を眺めて、一と雨欲しいなあと、 させてくれそうである。 つぶやくのである。此の句はその暑さを忘れ 熱帯夜が二、三日も続くと誰もがきまった

萩の露ひとときふれるやすらぎに

歌のなかに居るような気がする。 て露のひぬまのやすらぎなぞないのではない らぎとは、ひと思う句の多い美穂さんにとっ だろうか。此の句を見るかぎり三十一文字の 露をおびた萩の花に求めるひとときのやす

確かめて確かめて女あきらめる

な気もする。そばで待たされている者の迷惑 なぞは一向におかまいなしで納得のゆくまで て確めてと女性を強調しているめも作者らし ひっくり返している、これも女の性か。確め デバートのバーゲンセールの一と幕のよう

老妻と交す言葉もない夕餉

ことこまちがいはない。 うか。長い年月苦楽を共にして来た二人に黙 もくとして運ぶ夫婦箸に温い血が流れている 言葉なぞ交さなくともいいのではないだろ

]][柳 太平記 (43)

川柳界の題詠と景物主義 東

ると古川柳なる川柳古典は、明治期をもって だが、川柳史なるものをごく単純に一べつす 川柳にとたどりついた。これは私なりの私見 して処理し、明治期以後から現代の川柳の命 たらながいしろものも、今回やっと明治期の で第四十三稿目と相成った。そしてこのへっ 一応終止符を打ち、一種の骨董化した文献と この私説川柳太平記も早いもので、この号

らを唱えた久良伎・剣花坊の川柳再興運動を 期に入ると「狂句百年の負債を返えす」とや うのも織りこみはじめた。そしてそれが明治 から狂句となり、五世あたりから川柳風とい これを川柳点というのだが、それが四世川柳 脈を開始したものと考えている。 古川柳は前句付の一句建てにはじまった。

> て生じた景物主義についてである。 は不可分の関係にたつ「題詠」とそれによっ 余談をはさみ込むことにした。それは川柳と 川史二分説を掲げる所以はここにある なる短詩型の流れを、明治期で打ち止める川 期の明和・安永時代から胎動を開始した川柳 らしい川柳史が始まる理窟になる。私が江戸 川柳名が定着した時点から、明治期以後の新 したのである。従って川柳の場合は、世間に 同じくして子規による「俳句」の呼称も定着 に立つこの歴史的節目に立つに当り、 た。その提唱者は久良伎である。これと機を しおに、はじめて「川柳」なる呼称が定着 さて、江戸期と文明開化の明治期のはざま

> > 世の方便に由来する には一にも二にも、江戸期の点者・評者の渡 ような習慣が川柳界の体質化したのか。これ と「三光五客」の撰句方式がある。なぜこの 現在の柳界の特質に、いつに変らぬ「題詠」

史が古い。語典は中国の易経から出ている。 意味にも通じている。「天地人の三才となる の称をいう。才は裁ともいい万物を制裁する 支を東西南北の四方に配当した各方位の三個 称で、またの呼称を三支という。これは十二 即ち三才とは天・地・人なる宇宙の万物の総 別にそれを三才とも言い、これは三光より歴 星と云」(前田勇篇「江戸語辞典」)とあるが、 横につらなりたる三の星を江戸にて三光とい 文化四年(一七七五)物類称呼集に「中星の 三光五客の名を用いるが、三光のはじまりは い、また三ッ星という、関西にては親にない ことも子の徳なり」(謡曲逆矛)にもある。 選者が選句の場で優秀な作句の格付けに、 まず順序として題詠の講釈から入る

初めであるためで別名三元・三朝ともいう。 「俳諧に三光=三才が在るのは、 和歌·俳

と思われる」(「俳諧道と教育」小宮豊隆) 諧に横行した切書伝授の場合の資格認定用語 たものともいわれるが長くなるので省く。 このほか五客は、三才の天地人の人から出

ある。多留37篇に記録されている。 七)三月に文日堂礫川評の下女一題がそれで まる。その題詠の第一号は文化四年(一八〇 あるから、前句を句題として捉えたのにはじ の川柳点の発生は、前句付からの一句立てで つぎに柳界の常識である題詠だが、前句付

したかということである。 疑問は、なぜ三光=三才などの格付けが出現 さて、題詠に関する問題のあとに出てくる

名記している。この中で秋農屋はつぎのよう 堕落させた」(梅本秋農屋=三味線草随筆)と 句者を釣り寄せたが、これが後世の投句者を の勝句の三光に高価な景品を出し、多くの投 に記している。 天保の頃、五世川柳が町奉行に召喚され、 「初代柄井川柳が万句合を興行する時、そ

ある。ともあれ無名の初代柄井川柳が立机の

きをおくため、署名の有無に頓着しなかった

の景物は点者の自弁でござる」と答えたート 勝句の景品について下問された際、彼は「そ

> 収・手ぐさり等の当局の大弾圧を呼ぶ破目に 諧睹博をよび、その罪禍により遠島・家財没 このことが後世の雲鼓発案の笠付・沓付の俳 らないことは一つの成り行きだったようだ。 り出しの新進点者が、三万、五万の投句を呼 たらしい。常識的に考えても、無名のいま売 秋農屋の筆にまつまでもなく相当のものだっ 際は、花久・可有の助言もあり相当の金品を バラまき、一般大衆の射倖心を煽ったことは ぶためには、相当の景物を用意しなければな

もこのことを厳しく批判して筆をおいている。 更にこの秋農屋の随筆にはこうも記す。

このため、初代川柳の頃には、前句付の句集 入座の時点で支払うのがたて前のため、遠隔 句そのものの誇りよりも、獲得する景物に重 習慣でなく、名を取ろうより得をとれ、で勝 ても句主を記さなかった。このことは一種 を見定めて参会する狡猾な連中が多かった。 る景物を見較べ、景物が入花料より多いこと の地方にあるものは、入花料と勝句に出され 「狂句の投句の入花料はすべて開巻当日の 万句合の暦摺などには、その勝句を掲げ

のである。

りが厳しく思うに任かせなかったようだ。 生計もうるおっただろうが、何分当局の取り 金品を撒けば、宝くじ式に余徳が生じ彼等の キ数枚をそれにあてたとある。もっと派手に 扇子、盃類の小物となり、明治に入るとハガ 化政期の頃には、点者評者は、勝句に対し しかし、明治も半ばすぎになると

る」(三味線草) 景品代にしめて二百八十円も使ったと自慢し ている。それにまたかねてから景品廃止を叫 らえほどの景品を並べたてた室町会の大会は ぶ一党が、ぞろぞろ出かけたのだから呆れ 錦紗・角帯・風呂敷などを呉服屋の蔵ざ

なったのを想うと、初代川柳も罪な悪例を残

したものである。秋農屋の右の随筆の末尾に

わざるを得ない。 を出さなかった点は、 才五客制を一切廃し、 岸本水府は、主宰する「番傘」誌から、三 いかなる大会にも景品 一大見識ある処置とい

喪中に付き年末年始のご挨拶を遠

慮させていただきます

高 薫

風

誹 風 柳多 留 廿六篇 研究 (四丁)

石 南 H 成 得 佳 . 屋 野 六 真 郎 孝 本

多 木

敬 IF.

鈴

黄 H 旅 多 \mathbb{H} \mathbb{H}

> 甫 光

川所の人へかもめ也」三四というように関心 多田=賛。ちょっと違った場合だが、

64

雷を這入り稲妻形リにぬけ

だろう。 のない人には平凡に見えるものが他にもある

岡田二替

65

船頭ハへんてつもない松と椎

岡田二同 多田二賛

を見出だし家の首尾を案じて、やれ嬉しのも 占い、或は帰えり舟の暁の明りに嬉しのもり とより他に変って見えないというのである。 っては我関せざる事で、唯の松であり椎の木 りの首尾の松のと騒ぐのを、猪牙の船頭にと 南=首尾の松と松浦邸の椎の木 猪牙にて吉原へ通う遊客が、今宵の首尾を

大屋三賛。

柳から松椎そして桜なり

形り。

八木=駕で行っても、歩いて行っても、

稲妻

雷と稲妻は縁語

「雷」は風雷門または雷神門のこと。また

のであろう。

こうした駕の進路を「稲妻形り」といった

いたらしい。

たらしい。又随身門のところには駕が待って 従って随身門へ出るのは徒歩者に限られてい で右へ進む。駕では仁王門を通さないので、 にある榎の木のところ、右手浅草餅のところ り浅草寺の雷門を抜け、右手の伝法院の中頃 南=駕で吉原へ行く道筋として、並木町筋よ

松へ来たしいの木へ来たおもしろさ

安元桜2

安四智3

66 たまくの上下も供に貝杓子

として贈答品に遣われた。 南=「貝杓子」は鼠半切、安扇等と共に年玉

らせ、平素と見違え格段立派な姿を、オヤッ 持たせ、年改まって晴々としおそらく胸をそ めったに着ない上下を着、お供に貝杓子を

と見ての作句と思う。

貝杓子だぞと麻上下でいひ のどかさはあさ上下で貝杓子 河四:1 28

28

岡田二回

67 袖形で昼寝の顔の蠅を追ヒ

子の微笑しい写生句 をつける角に丸みをつけた形紙 南=「袖形」は和裁の用具の一、 る蠅を、手許にある袖形で追払ったという母 裁縫仕事の側に昼寝している子供の顔によ 袖口の曲線

袖先の丸みのところを軽くつまんで、団扇を 本多=「袖形」は形紙でなく、袖口の下にあ たる角の形、あるいは丸みのことと思うが。 く動かすように蠅を追ったとの意ならん。

には、 リ」である。 八木=「袖形」が問題。『風俗志』には、「袖 の型をとる定木」とあるが、平凡社『大辞典』 『広辞苑』も同様。この場合読みは「ソデナ 「袖口の下にあたる角の形」とある。

多田=本多・八木氏説賛。昭和九年婦人俱楽 やはり、本多氏の説をとりたい。

裁用具特価御提供」という広告あり。その中 部四月号の付録「和服裁縫全書」の巻末に「和 に「袖形まるみ」一組○・○八円というのが

岡田=諸説の通り。

献立テにふしを付ケてハ子をねかせ

の通りである。 場合によっては亭王の追い遣われる事は例句 寝かしつづける家庭風景。子供第一主義であ 指図する献立てに子守唄の節を付けて子供を 南=下女が来て伺いたてるを添乳中の女房が れば、少々の女房の横着も見過ごされるし、

添乳していふ献立はふしかつき

添乳して何かていしゅにかぶり振 拾十・21

って、宰相の季林甫の死後の政界は彼の一人 政をにぎる度支郎中にのぼり、国忠の名を賜

もあったろう。 おつけ」などと勝手な文句に節をつけること おかずはなんにしょう、いわしに大根におみ 多田=ほんとうの子守唄でなくとも「今夜の

69 かうに成ッたと夕飯シをわすれてる。 岡田一同

とである。 えぬといわれ、食事を忘れることは毎度のこ 好きの句。とにかく、碁好きは親の死目に会 になって夢中になり、夕飯シを忘れている碁 南=「劫・こう」は囲碁用語。囲碁で劫争い

僚の劫争いも盛んです。 多田=賛。私は全くの傍観ですが、職場の同

岡田二賛

屋敷中ゥやうこく忠か幅をする

の徒であったが、軍隊に入り、楊貴妃の縁で 若い時は学問もせず飲酒や賭博にこるならず 南=「楊国忠」は楊釧といい楊貴妃の従祖兄、 監察御史にぬきんでられ、要領よく政府の財

上の代表格が楊国忠であること。 る意で又、川柳によく登場する妾が兄の歴史 舞台になり「天下を私する」ものとなった。 楊国忠の名を借りた、単なる妾が兄を指した 本句「幅をする」は幅を利かす、威勢を張 官殿とせず「屋敷中」とあるから、本句は

八日にハやうこく忠へかぞうなり

36

ものと解される。

本多=賛。その横暴が目にあまると、 国家老楊国忠が威をくじき 楊国忠が威をくじく国家老 fi ... 37 八一 · 18

多田一質

で国家老の出番となる

八木=賛。劫は往々大石の死活、一局の勝敗

に関係する。飯どころではない。

| | | | | | | | |



正 客 選

目を閉じて愛の数よむ女々しさよ母の忌や縁の遠いをまず詫びて好みが好きで孤独に耐えられずお好みが好きで孤独に耐えられず まず仕入値を言うて売り 尾市 杉 Ŧ. 歩 やさしさに飢えた蛙 踏 未来から帰れば宝くじを買 みはずしてからの片意地はりつづけ 揆の血継いだ民謡とは知らず の二段飛び 大阪市 村

駈け出した兎もう後戻りは出来な ここからは下り坂とは教えまい 夫の指九本までは信じてる 感が哀しい事に冴えている ょ

行きずりの少女埴輪の目となりぬ 弘前市

中

叶

針満に月

へ蛍光灯は消して置く

空巣の足をとまどわせ

八糸通

して星をつなぎたし

萩尾花村雲御

所は秋の彩

ラッシュは元ヅカ生と言う尼僧

兵庫県

中

É

李

金木犀

10 夫婦

赤 Vi 被岸 花

竹

内

花

代 子 島 脱サラの

0

聞

でく哀

しい話絵空事

梨の皮乾き休みの工事現場 英語塾菊咲く 家の一 間 借る

薄曇り行く人窓を見

て通り

いつまでも自転車置場で待って居る

たい かまわれたくない母娘です

京都市

松

111

芳

子

か

雑草の抜きよいほどにのばしとく まだ若い気持ちで自由な旅にする

30 -

E

田 鶴

子.

専業主婦羨ましいと友は言う 専業主婦羨ましいと友は言う 専業主婦羨ましいと友は言う	がと医師が言かと医師が言いると がと医師が言いると がととの軽いこのをいこのを がととのが言いるとといるといるとといるとといるといるといるといるといるといるといるといるとい	横向いたままの返事が突きあたる まだ秋ね病床春を待っている まだ秋ね病床春を待っている あきらめた心の底で身もだえる	成と る 9 野市	ネら
春	ジ	情		
江	子	三千代	些	
北海道の旅 和歌山市 坂 部 紀久子 遅いけど自分の敷いたレールにのる 貯めすぎた女に遣えとケシかける おいた と思う親指みかんむく	って母のは一緒にいて私も	大阪市 西 村 美佐女 一言がこんなに空を曇らせる 一言がこんなに空を曇らせる 一言がこんなに空を曇らせる 大張って出世の端緒買いに出る	自耐風海群衆の	い い 話

留守にする鍵はかわいた音をたて 知らに包んで女のエゴ守る をしさにゆれるススキは傍観者	亀放生してからねむり深くなる 鳴きながら負け大腹が立って来る 鳴きながら負け大腹が立って来る	要捨てに行って知人と長話 をれぞれにしたいことする老夫婦 をれぞれにしたいことする老夫婦	妻呼べば「はい」と答える九官鳥 恋知らぬ紙人形の薄き胸 恋知らぬ紙人形の薄き胸	を 大雪の麓は雪とたわむれる 大雪の麓は雪とたわむれる 大雪の麓は雪とたわむれる
下	本	Ш	崎	原
玉	文	鈴	あ	千
子	子	魚	き 子	里
ここからが旧道ですよ法師蟬 島根県 東 原 福 ここからが旧道ですよ法師蟬 島根県 東 原 福 どほどにして人生の角曲がり	動物の勘だと女の予防線素直にはなれない場合もある女素直にはなれない場合もある女素の形にと女の予防線ではない場合もある女	石仏洗って逃げた俄雨 書津市 久 保 正 ボロボロの自分背広にかくす朝 東子一つ歴史の匂う旅の宿	産顔に似合わずお口の悪い人 下崎市 西 村 かす 顔病の無残や父のあばら骨	慮してくれた秋 猫の飯皿仕舞い のプランを嫁と

竹原市	離婚話ここは女が悪かった	早発ちの客を包んだ川の霧	赤トンボ飛ぶまち人が減ってゆく	不仕合せ続くけれども春が好き	西条市	米櫃を満してホッとする主婦で	堕ちてゆく私にすうっと蜘蛛の糸	母と子の会話童話めく二歳	コスモスは愚痴をこぼさぬ秋の天	竹原市	落日の美事さしばらく足を止め	六十路閑でも困り忙しくても困り	仲裁へ大阪弁が物足らず	だまされてやっているのに長電話	大阪市	雑踏であくびしている一人ぼっち	もやしにも命の根っこついていた	行くあても無いまま旅で月を見る	病床の母は眼鏡を捜さない	松原市	チラチラと木立へのぞく秋の湖	枯葉が秋を伝える音で鳴り	秋雨に障子が重たく軋む音	うぬぼれが無情に人を寄せつけず
古					片					古					稲					佐				
\mathbb{H}					Ŀ.					田					本					藤				
鈍					明					比呂					凡					藤				
舟					水					子					子					子				
病床で過ぎしあれこれ懐かしむ	トイレまで歩けて生きる自信湧き	点滴の十二時間は浮いていた	教え子にヘアを剃られて恐縮し	病床にて	丰 月 本 林	エンピツの先の丸さが思慕となる	お隣りの機械の音にはげまされ	後姿でときめきが通りすぎ	三番街できれいな秋を見てまわり	大阪市	蟻んこよお前も生きるため歩く	来る春を信じて花の種を播く	剃り跡の青さ尼僧はまだ若い	孤を抱え両膝日々に萎えてゆく	名古屋市	賞狙うファイト女も負けていず	人間味消してゴロリと缶ジュース	下戸の父持って夫へ注ぎこぼし	造詣が深く気軽に辞書を繰る	鳥取県	どん底の砂は意外に白いかも	振り上げたこぶしの涙が見えないか	悪夢かも転げたところにあった石	欲を捨てるにまだ早い五十路
					波					给					越					羽津				
					た					木					村					川				
					ただ					節					枯					公				

梢

Jŋ

子

お

職終えて余生楽しむ日々多忙 職終えて余生楽しむ日々多忙 職終えて余生楽しむ日々多忙 一型 一型 一型 一型 一型 一型 一型 一型 一型 一型	誘われた方の落度を叱られる 大洲市 横 田 放野同士の友情妻に羨まれ	病窓へ生きてる証鳥の声 東予市 小 山 悠 大阪市 吐 田 公 大阪市 吐 田 公	にこにこと嘘聞いている妻に負け女って損ネと亭主敷いている 熊本市 有 働 芳	旅をして行く先き先きに別れあり熊注意さすが北国だと思うに雪虫舞うて寒い明日	尼崎市 矢 萩 貞
枝	人	泉	fili		子
収穫のカボチャ冬至へ一つ置きなんとなく威厳をもった父の椅子なんとなく威厳をもった父の椅子でがあけても雀の鳴かない街中で複があけても雀の鳴かない街中で	この頃は神が仮面をつけている う日からの日記いい事丈けをかく あの雲になら一命を託せそう	株に十万億土は遠からん 大に十万億土は遠からん 大に十万億土は遠からん 大に十万億土は遠からん	酔いのあるうちは男の貌でいるかりふれた才も美人は褒められるない。	を至南瓜嫁と無言の陽が昏れる を至南瓜嫁と無言の陽が昏れる を至南瓜嫁と無言の陽が昏れる	西宮市
宮	足	H	藤	中	朝
崎	立		原	Ш	Ш
シマ	由美	虹	鈴	幸	千世

泉佐野市	戒する鏡のような人と 律で言えば正しきこと	すすぎ水女きれいに物干場お多福と書けばニヤリとこずかれるいの話だけしかしない篤農家島根県	空いさ	うた夜落莫感にさいなまいては老いの幸せ追って化防止 日記をかいて今	旧灯台松の青なく砂塵に立つ(#)健忘症食べてから刺身思い出し嫁の味消えて姑の味となり	穏やかな夜を春蚕の肥る音蛍火の様な刺激で物足りず選火の様な刺激で物足りず寝屋川市
真	官	岩	朝	白	佐	立.
崎	野	H	倉	石	野	床
浪速	育		大		白	晴
子	草	和	柏	潔	水	風
空の青海の青見る地平線	れを許さない 糸	帰省した息子は眠ってばかりいる 色づくと待てぬか青い実で落ちる のに化粧今にも口をひらくかと (味逝く)	を を を を を を を を を を を を を を	老いの連れ老妻のぬくみが身に沁みる地下足袋が足に馴染んで捨て切れず握手する魂胆さむい風に逢い	散歩道限度を忘れつい遠出 岡山市 串 田散歩道限度を忘れつい遠出	還暦をまだ働ける齢とする 蛸壺を出される蛸が身構える
	谷	谷	木	野	HI (2)	U
	春	利	歳	不	句 味	ろって
	草	美	栄	-	地	子

最大の抗議無言で押し通す 堺 市 田 辺 哲 寿	ふと仰ぐ深夜工事に犬が佇ち 新築に車庫玄関と肩を張り 公園のベンチへ秋がふきだまり 坂 な み み み	最後まで残る酒豪の靴がない 高知県 山 崎 広 風 高知県 山 崎 広 風	夜を通しだんじり囃子続いてるきょう一つ言葉がふえて孫愛し愛国心押し付けずとも持ってるよ 和泉市 岡 井 やすお	病の処方を医者も心得る千をきれいに拭う今日の千をされいに拭う今日の	れ言鳥アルトで笑妥桑)返し マルチーズだからマルちゃんと名をきめる 月皎々ピアノは澄んだ音を出し 大阪市 杉 本 智慧子	母子家庭母に散髪してもらい老練の海女敬老の日の笑い
野仏が目印で里へ足はずむ老母のペン愛の深さを知らされる手の鳴る方へ素直な耳で老いている	ボクがとる声を電話は知っている 書き替えても設計欄にある名前 定年で去る社に残す設計図	は留守居の	閉会の後の熱気が地をゆする 燈の消えた夜空に熱気まだ消えず 黙々と走者が一人走り抜け	県 し i 本	蜂見れば授粉のことなど忘れ打ち 蜆とる汗いっぱいの老いの幸 働けるしあわせ知ってる手の温み	今の子に昔話を作り変え 島根県 福 間 芳 枝

兵庫県	こおろぎに空気の汚れ聞いて見る	不機嫌な客へ改札音を立て	中流のまぼろし追って共稼ぎ	八尾市	コオロギの最後競うて秋最中	仕合せを人は何処まで追ってゆく	人柄が微風の様にしみ渡る	尼崎市	浪頭つぎつぎ寄せて見あきせず	夫を慕う心は動作のそこ此処に	茄子一つもいで感謝の追肥する	兵庫県	干し並ぶ客座布団に秋日和	追われても生きねばならぬ群雀	騒音も生活の音と目をつむり	高知県	知りすぎた女某日それっきり	割り勘の茶のみ友いて虹をもち	句読点どこでつけよう七十五	兵庫県	口実を聞くだけ聞いて秋の冷え	口実に負けて小さく女座す	玉の汗拭けば小さな秋を見た	東広島市
森				Ш				中				藤				Ш				野々				石
脇				下				辻				原				下				П				井
和				みつ				千				捷				登				ゆう				さわ
子				る				子				7				舟				う也				子
御先祖へ今日は現代食と詫び	地蔵さま黙って八百屋に店を貸し	泉佐野市	話し合う同じなやみを持つ人で	箸袋小唄をのせて旅の膳	島根県	野次馬と言われたくない距離を置く	蟠り解消剤の孫が居り	岡山県	今日だけを写す鏡を信じとく	歳をとっても男だからと重い方	大和高田市	矢面に立たされ捨て石の役を閉じ	樟脳の利いた婦人を助手席に	鳥取市	冷え込みが身にしみモミジの便り聞く	両親に夫婦の幸福見て嫁ぐ	大阪市	曳き山の囃子に汗も砂も飛び	赤信号無視で行革渡り出し	秋の虫顔みせぬから尚佗し	唐津市	海鳴りの宿で留守の子思い出す	帰省子のあるらし干場にぎわいて	秋晴れへ逢いたい人のシルエット
		大			岩			池			岸			武			林				浜			
		Ι.			佐			H			本			H			ひ				本			
		静			富			*			豊平			帆			3				義			
		子			子			仙			次			雀			子.				美			

八戸市	それなりの色を残して日傘行き	そうですか善人ですか短気者	唐津市	振り向いたとたんにうれしい人の顔	髪形変えて少うし若くなり	島根県	退院の老妻を迎える髯を剃る	親馬鹿の足は手の鳴る方に向く	青森県	アナウンサーさすが一番赤い羽根	寝そびれて聞く虫の音へ月明り	岸和田市	入車禁止古いタイヤで区切られる	護岸でき住みにくい世と蟹のぐち	唐津市	金槌の頭押し押し釘を打ち	サービスに芒も添えてダンゴ売り	大阪市	旅に出て金持のような顔してる	降って来て忘れた傘を思い出し	八尾市	育児書が埃かぶっている平和	嫁の味方していて淋しい父でいる	鳥取県
島			仁			堀			岩			吉			桑			平			松			加
田			部			江			淵			水			原			井			下			藤
昭			四			百						照			掬			路			蕉			茶
治			郎			代			星			江			治			芳			路路			人
ネクタイは職人の顔を変えさせる	奈良県	嫉妬ではないが言葉に刺がある	孫来ねば来ぬで淋しい敬老日	唐津市	野草やく煙の色にある想い	思い出を消して女は炎をもやす	米子市	真直に生きる男に影はない	読書の灯消してロマンの月に酔う	今治市	勘忍袋ほどほどにして老い深し	朝露を踏んで健やかさに感謝する	大阪市	親はいう素直になれと付けた名ぞ	妻のメモ日替り奉仕カレンダー	唐津市	床柱だけが誇りの旧家です	敬老の日を漫才でいじめられ	大阪市	2 D K 嫁入りの荷を限られる	乳児室で小猫のように頭振る	交野市	入院をしても老母は針と糸	今死ねば困ると妻の食わせ様
	喜			Ш			沢			新居			Ш			木			板			Ш		
	Ш			T			田			出			本			塚			東			本		
	古都			勝			Ŧ			胡			炉			素			倫			テ		
	的路						存			頹子			斉			石			1.			ルミ		

牡丹よりモデルにピント合せてる 一人者佗しく過す盆休み 富田林市 伊 庭 勇	# <u>É</u>	九九言えぬ兄と放課後の根くらべ 山 脇 正 之罪一つ残して消しゴムちびてゆき	小芋むく母に泣きごと言いながら 草生やし農家は豊かになってゆく	古くても柱時計は捨てられず 橋 元 美 恵断酒会限度を越えた人ばかり	PTA自信過剰の高い声 一人だけ下痢せぬわけを又聞かれ	泣いて酒笑って酒の五十年 尾鷲市 渡 辺 伊津志割勘で呑んでも見せる上司面	塩 品 曲	石段に新調見せる靴の裏
長電話方の吹て焦こけ	を宣舌文の尊で魚上げ 富田林市 奥 田 いさ子 眠れぬ夜柱時計の音を聞く	ポ遅れてもええじゃないか盆踊り 富田林市 森 谷	村島秀	大阪市 岡 田 すみれべそかいて仲間はずれの一人っ子 富田林市 堀 川 美佐子	据 野 力津	金踊りやはり師匠はよく目立ち 富田林市 斉 藤 庄太郎	う人 東大阪市 三 宅 哲ように起き	kをの木段が来ごと今明の善(B織) 国 男

機械が秀句を憶える話〈1〉

竹 内 紫 錆

か。もちろん、日本経済に関係のないことは、もちろん、日本経済に関係のまま印刷され続け、永は毎月電算機と無縁のまま印刷され続け、永は毎月電算機と無縁のまま印刷され続け、永らに検索しにくい形で鑑賞されるのであろう

もちろん作るのは人間の頭である。したがもちろん作るのは人間の頭である。したがって、機械から離れた生身の力で句作というで頭の体操」をやり、そのフィニッシュを見かし、先輩作家の残した秀句が人間の記憶の限界以上に溜まるのを機械に覚えさせ、索引を決めて題ごとに引出すという作業までも拒を決めて題ごとに引出すという作業までも拒

九時に並んだ人の列が、開館とともに吸い込東京虎の門にある特許庁の資料館では、朝

組む。 まれ、 た感じで「類想」を拾い出す。 標題や要旨をサッと眺め「取一捨千」といっ ある。そこで調査マンが書類を見るときは、 料を払う結果になるので、企業会社は真剣で が見つからないと、発明元に何億という特許 ぶしとは限らないが、もし先行発明や「類想」 をみるのが早い。この調査の目的は、特許つ じ索引に従って調べることのできる特許公報 以外の資料でも見つかるが、何といっても同 発明を拾い出すのである。 と、最近の重要な発明に類似点のある過去の 音を一日中立てるのだが、何をするかという 人で満席。その人たちは、 書架に近い席からふさがってゆく。百 特許公報をめくる 「類想」は、 外国語にも取

それは技術的には、とっくに大型コンピュー能か、と考えるのは私ばかりではあるまい。

川柳程度の単語群の登録と抽出(検索)は可で含めて、機械の打つ字が賑かになるにつれ電算機の匂いをかいでおられよう。電訳器まかに迫ってきたし、読者も給料明細書などにしかし最近は、マイコンのような機械が身じもがし最近は、マイコンのような機械が身じる話でもなく、電算機で選句する話でもない

ことわっておくが、これは電算機で句を作

ターで出来ているのである。

むかしは、特許庁の審査官が出願書に目を で知下していた。(ただし三年間も滞るので 今は制度が変っている)無事に審査官の目を 通過した出願書は公開されるが、ここでも利 遇過した出願書は公開されるが、ここでも利 をする。紙めくりもそのためた。

年完成した。つまり特許公報の題や要点をコそして、つけ足しておくが、機械検索は先

はおわかりであろう。

業は減ってゆくであろう。めがて紙めくり作め、もう二、三年になる。やがて紙めくり作出して調べる方法がオンラインで行われはじンピューターに記憶させ、随時テーマ別に抽

でなく図形を発案した意匠登録の審査であろなくなる日が必ず来る。一番困るのは、文字なくなる日が必ず来る。一番困るのは、文字ないないとうな出願があったとき、収拾のつかないとのように科学技術情報の増加に対処して

さてここは、静かな選者の書斎である。 いま選者の目の前に、気になる一句がある で見たような句だ」と思うものがあったり、 で見たような句だ」と思うものがあったり、 で見たような句だ」と思うものがあったり、 である。万人むきの解りやすい句ほど、過去 である。万人むきの解りやすい句ほど、過去 に類句がありそうな気がしてくるのではある に知られていた、というケースも起りそうだ。 こんなときに選者が、みどりの窓口のよう こんなときに選者が、みどりの窓口のよう

> た回答がブラウン管に現われる……。 そういった仕組(システム)があってもよ そういった仕組(システム)があってもよ さそうである。上五から順に字を叩く方法も さそうである。上五から順に字を叩く方法も さそうである。上五から順に字を叩く方法も さるだろう。十七音全部を打たなくても、途 中まで字句の同じ句が何千件あるのかを機械 中まで字句の同じ句が何千件あるのかを機械 中まで字句の同じもが何子件あるのかを機械 のまたのしむこともできるはずである。もち ろん名句秀句(漢字とかなで可)を何十万か ろん名句秀句(漢字とかなで可)を何十万か ろん名句秀句(漢字とかなで可)を何十万か

 \Diamond

こういう機械検索の仕事は、新しい創造活動の展開のために使うのが本旨である。そし動の展開のために使うのが本旨である。そし動の展開のために使うのが本旨である。その成力(電算機の)が大いに発揮される。いまその流儀を短詩形作品にあてはめるとしよう。しかし大量に溜めるまでは辛棒。作句家は歳時記や名句集を参照する程度だろうし、選者級の人も一文を草するときに秀句のし、選者級の人も一文を草するときに秀句のし、選者は類想続出に当惑する、という話をその選者は類想続出に当惑する、という話をその選者は類想続出に当惑する、という話をるのはいいとしても、惹かれる一句があってるのはいいとしても、惹かれる一句があって

句を選ぶのは、年間を通した再選抜を、それ 一口に言って、山と積まれた句稿が質の低 一定数の句を載せるのが実情であろう。質の 一定数の句を載せるのが実情であろう。質の 低下をおそれて厳選すれば会誌は薄くなり、 くじけて投句をやめる人もあろう。そこで秀

も復数の選者で行うのがよいようだ。

(続く) すいっのが私の思いつきである。というより「夢」である。 (続く) うより「夢」である。 (続く) うより「夢」である。 (続く) である。だが、選者の記憶量(月並句を含めてある。だが、選者の記憶量(月並句を含めてある。だが、選者の記憶量(月並句を含めてある。という経過で選ばれるのではあるまいか。その時に「初めて」の句が本当に日本で初めその時に「初めて」の句が本当に日本で初めその時に「初めて」の句が本当に日本で初める、という経過で選ばれるのではあるまいか。その時に「初めて」の句が本当に日本で初める。というのが私の思いつきである。というより「夢」である。 (続く)

川柳塔柳箋

料 二百四十円

と、数秒後に「一ケンアリ 一六八六ネン

意が分って、そして類句の記憶が残っていな採否を決めかねる場面がありそうに思う。句

という)を打つ。例えば「カエル」「イケ」すわり、カタカナの並んだ鍵盤(キーボード

俳句・川柳作品バンクの端末機械の前に

「フルイ」「オト」などと句の要素語を叩く

おもちゃ箱の隅で出番を狙う鬼 サンダルもうらぶれてきた風の街 木

目の底に波あり花びらまで浮かべ 静けさに嵌ったまんま石の唄

大量の仏壇移民史終り告げ ホノルル市 前 北 海

橘 高

薫

風

選

真昼の奉仕六九型を馳せ

玉手箱は男に先に開かせる

老いること拒否する赤いスカーフで

色づいた秋が落ちてる水溜り 高槻市 柳

たいこ橋今日に別れを告げる時 電話より心の通うペンが好き 岡山市 Ш

お化粧をしてますうっとりしてい 大阪市 河 います 君

悲しい絵思い出させる秋ひとり 船がゆく去り行く人は忘れよう

婦長さん美人に見える時がある 老教師洒落言うところきまってる

騙し舟逆を突いても騙し舟 張りめぐらす策は自縛の糸ならん

騙されていて善人の高いびき

ンドルの片手で雑兵髭を剃り

浜田市

中

幸

居留守使う酒と昼寝は欠かさずに 寝物語りに釈日満がふと浮かび

原

宵

明

今年また逢えずに冬が来てしまう 下駄箱と椅子はいまだにさみしがる

鳥取市

H

満

蟻のどよめき百姓一

揆のよう動き

智

水

レーガンの言うままP3Cがふえ

大阪市

智

子

自転車で髯なびかせて九十翁 働き抜いた蟻の死骸は見当らず 秋草へ風も葬送曲となり

松山市

真

風

老蝶の終焉赤い花に寝る

青森市

T.

藤

甲

吉

犬が去りソロソロ木から猫が下り

下手が出るので喉自慢おもしろし 大阪市 野

翔びたくも家鴨は尻が大きくて 冷凍が解けてやれやれ蛸の足

都 倉 求 芽

富田林市 岩 H 美 代

潮 花

端 柳 f.

開山

日の導師

7

F 蕉 器

平田市 家 代仕男

笠岡市 遠

武 太

> 殉教者のような死亡記事を読む 満期日は女の手帳に書いてある

T

代

負けて来た心をほぐすひとりごと 冷たい手義手なら握り返すかも 村

早

苗

夢売りに夢を買うたは風の街 高知市 111

惠

冬がきて二人の視野にいない鳩 媚を売る女に玉虫色のうろこ 島根県 砂 白

竹を踏む贖罪の如ふむきょうも 尚 古

四十本すうとは余程ひまな方 とても言いにくい言葉が一つ十二

の座像見る気魄 米子市 戸 H 鶴

土俵入りガッツポーズの美学かな 町田市 内 紫 錆

化野の月はやさしく石濡らす 西宫市 林 はつ絵

寒いから遠い想い出抱きしめる 和歌山市 西 幸

倉敷市 粉 T 翁

これしきのことにわたしを見失い 倉吉市 奥 谷 51.

敵よりも劣等感が恐しい 子 朗

郵便も電話も来ない萩こぼる 和歌山市 浦 野 和

美術品の保存金もち役に立ち 兵庫県 遠 II. 11]

城 修 史 住

大阪市

別れ話にも女化粧する	旭川市 朝 倉 大 柏	63	高知県 赤川 菊 野	諸行無常の灯を見ていたり深い秋	和歌山市 松 原 寿 子	写真師が今日も首だけすげ替える	富田林市 中 村 優	淑女かも知れぬ魔女かも知れぬ	和歌山市 若 宮 武 雄	遠き日の人と聞きたし蓄音機	寝屋川市 柴 田 英壬子	霊塊を紙に預けて消える墨	尾鷲市 渡 辺 伊津志	姫様に打出の小槌振れませぬ	吹田市 西川景子	笑い声ガラスはくもったままがよい	寝屋川市 江 口 度	秋風へ女の友情水に似て	米子市 石 垣 花 子	足拭いて上ったと猫見てくれず	今治市 矢 野 佳 雲	一服をせよとロボットには言わず	米子市 小 西 雄 々	曼珠沙華母の柩を送るかに	大阪市 神夏磯 道 子	秋の風休戦ラッパの雑木林	唐津市 桑 原 掬 治	孤児の瞳に親子すずめの口移し	札幌市北村深星	ちぎれ雲絆の距離を浮彫りに
松原市 本 多 洋 子	飲み過ぎの寝息をそっと聞きに行く	島根果 堀 江 芳 子	落ち着きが指先まではまだ来ない	島根県 堀 江 正 朗	ポイ捨てに慣れても子まで捨てないで	大阪市 朝 倉 利 義	芒野をゆけば背を押す白い風	島根県 榊 原 秀 子	城跡に立つと聞える鬨の声	堺市田辺哲寿	地獄絵のこわさに心寒くなる	東大阪市 竹 中 綾 珠	中流の意識が雪見障子する	岡山県 池 田 半 仙	亡夫の墓隣りはコスモス花ざかり	具塚市 行 天 千 代	すぐできる合鍵安い命かも	今治市 新居田 胡頹子	千年の夢を追ってる石と苔	大阪市 北 勝 美	あれこれと思案ばかりの髭を剃る	浜田市 佐々木 裕	縄文の詩をうたっている壺か	伊丹市 樫 谷 寿 馬	まばたきをするたび秋が深くなる	大阪市 津 山 刀 水	新婚三ヵ月どうやら夫婦らしゅうなり	育敷市 藤 井 春 日	結論の袋二つを用意する	岡山県 稲 岡 正 之
蜘蛛	越		唐津市 木 塚 素 石	#	田口虹	用車で乗り	八塚三五	ブ酒	鳥取県 清 水 一 保	私が私であるパスポート	曹津市 仁 部 四 郎	()	島根県木村はじめ		中	キューピットが狙う愛の矢みな外れ		看板の横綱又も負けてゆき	唐津市 新 岡 回天子	児を抱いて妻のバレーを応援し	島根県 角 耕 草	幸せは笑う力を貯めている	青森県 五十嵐 操 史	に映る山	松	困る眼がだんだん馴れる袖の下	市川	コスモスをかきわけ文字を読む石碑	浦村	絶対安静時計の針が止ってる

妻久 藤 スが 間 保田イド 宝 本 事 本 事 本 事 本 事 本 事 中 中 本 事 中 中 本 事 本 事 中 中							L	柿熟れて木登り出来ぬ齢淋し	康恵	水	清	大阪市
一下万子 自衛隊理解者少しずつふえる 与根一 ローマにも通じる道が渋滞し 毎		午前9時15分から		ル	テ		奥	兵庫県			支	一般論と言うても承知しない
十万子 自衛隊理解者少しずつふえる 中根 中根 中根 中根 中人 中根 中人 中根 中人 中人	多一方主	= 1 2 E / = 3 = 3 = 3 = 3					5	心浮く訪問和脈に切り替える			5	一支命・経・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
一下万子 自衛隊理解者少しずつふえる	育一女美	2月6日(ヒ)ラブト		2	な	坂	野	、				100
十万子 自衛隊理解者少しずつふえる	しく系	大阪放送局。老後をたの						胸の鈴ならした人は遠い星	朝太核		膳	大田市
十万子 自衛隊理解者少しずつふえる	4 N H K	大阪市東区馬場町6-	投句先	春	Ŧ		沢	J)) 介: 米子市	1 1 2000	イイド	ネスカ	社会科の勉強になりまっせい
台の子と話し	9	(ハガキに三句以内				お客	らる	バナナせり気っぷを買って	杜]1]	松	京都市
会の子と話し				美	義		浜	唐津市				停電へ大都市だらしない姿
本 村諷子 水割で今日の疲れをのみほして							11	銀行へきて妄想にくすぐら	隧		欄	大阪市
本 村諷子 水割で今日の疲れをのみほして	恵美子	森		_	勝		Ш	唐津市		9	振り	繋がれた馬に似ているくらし振り
株 瑞 枝 目の涙乾き具合で攻めてみる								真相が三途の川に埋れてる		宅	Ξ	羽咋市
株 瑞 枝 目の涙乾き具合で攻めてみる 株 里 地震にも核にも弱い大八洲 岡山県 岩 地震にも核にも弱い大八洲 岡山県 岩 地震にも核にも弱い大八洲 岡山県 岩 地震にも核にも弱い大八洲 岡山県 岩 世 地震にも核にも弱い大八洲 岡山県 岩 世 地震にも核にも弱い大八洲 岡山県 岩 田 中 北 地震にも核にも弱い大八洲 岡山県 岩 田 下 みつる 地質・一下・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・		NHK川柳募集		IJ	公	津川	羽	鳥取県			X L	挙式シーズン微妙に女心揺れ
高 橋 千万子 自衛隊理解者少しずつふえる と記を湧かす赤い舌 と伸び と伸び と							3	目の涙乾き具合で攻めてみる			林	米子市
高 橋 千万子 自衛隊理解者少しずつふえる と話を湧かす赤い舌 として というというと話を湧かす赤い舌 を				友	博		岩	岡山県				情に棹さすこと多し七十路
高 橋 千万子 自衛隊理解者少しずつふえる と話を湧かす赤い舌 とは違うしょうしょう と話を湧かす赤い舌 原 伊 都 さらさらと話を湧かす赤い舌 を	に3句)							地震にも核にも弱い大八洲		木	高	
高 橋 千万子 自衛隊理解者少しずつふえる				つる	2		Ш	八尾市			0	握手した手に冷酷な敵意持ち
高 橋 千万子 自衛隊理解者少しずつふえる		*					米	もつ一俵耕土深けりゃ稔る	富志子	崎	島	岸和田市
奥山 美智子 讃美歌を聞けば素直な足になる 東津市 福 集 の		いいなあ歩きたくなる	自由って	和	Ξ		岩	島根県)	決心を川の流れにゆだねよう
大阪府 坂 口 公 子 追憶に酒がこばれて居る手酌 大阪市 白 石 紫 峰 酸素風呂神妙な顔に玉の汗 紫 峰 酸素風呂神妙な顔に玉の汗 紫 峰 酸素風呂神妙な顔に玉の汗 紫 峰 で	好	稲					なる	讃美歌を聞けば素直な足に	美智子	Ш	奥	尼崎市
(学) 女 花道の喝采楽屋できく妬心 (美) な で (大阪市 白 石 大阪市 日 日 日 日 日 日 日 日 日 日 日 日 日 日 日 日 日 日 日			追憶に酒	子	公		坂	大阪府		び	んと他	朝の靴はけば背すじがしゃんと伸び
京田 中 中 中 中 中 中 中 中 中	對	岡山県 荻						花道の喝釆楽屋できく妬心		Ш	吉	宝塚市
戸市 小 泉 紫 峰 酸素風呂神妙な顔に玉の汗 大阪市 白 石 大阪市 小 泉 紫 峰 酸素風呂神妙な顔に玉の汗 本 智慧子 野仏へ花一輪の心がけ まい かっ消えた り は さらさらと話を湧かす赤い舌 ない たびまい ない		条山子の孤影に俺をみた	小山田の	昧地	彻		串	岡山市				汗光る鈍牛老いぬ底力
株 村諷子 水割で今日の疲れをのみほして 智慧子 野仏へ花一輪の心がけ ならさらと話を湧かす赤い舌 間 芳 枝 見おろした街とは違うたたずまい た 与根一 ローマにも通じる道が渋滞し だ江市 福 間 芳 枝 見おろした街とは違うたたずまい 暦津市 岩 崎 とらさらと話を湧かす赤い舌 という		阪市 白						酸素風呂神妙な顔に玉の汗		泉	小	戸市
原 伊 都 さらさらと話を湧かす赤い舌 横 長おろした街とは違うたたずまい			野仏へ花	慧子	智		杉	大阪市		12	作えた	想い出は止そう花火はもう消えた
本 与根一 ローマにも通じる道が渋滞し 横五市 浜 本 久仁於 寝転べば両手両足のばしてる 唐津市 浜 本 久仁於 寝転べば両手両足のばしてる 唐津市 岩 崎 海線理解者少しずつふえる と	中亜	米子市 田・					舌	さらさらと話を湧かす赤い		原	桑	米子市
本 与根一 ローマにも通じる道が渋滞し 腐転へば両手両足のばしてる 唐津市 浜 本 久仁於 寝転べば両手両足のばしてる 唐津市 岩 崎 海線子 水割で今日の疲れをのみほして 卑婦になり自由な中にもある鎖 島 本 村諷子 水割で今日の疲れをのみほして		た街とは違うたたずまい	見おろし		芳		福	松江市				木犀が散った命日忘れない
唐津市 浜 本 久仁於 寝転べば両手両足のばしてる 橋 千万子 自衛隊理解者少しずつふえる 用 村 映 輝 寡婦になり自由な中にもある鎖 産津市 岩 崎 産利田市 福 島		井					L	1	与根一	木	册	
・橋 千万子 自衛隊理解者少しずつふえる - 唐津市 岩 崎 本 村諷子 水割で今日の疲れをのみほして - 鼻婦になり自由な中にもある鎖 - 東和田市 福 島			寝転べば	仁於	久		浜	唐津市			われ	ふり切った愛をほめられ労られ
木 村諷子 水割で今日の疲れをのみほして 輝 寡婦になり自由な中にもある鎖 島							る	自衛隊理解者少しずつふえ	千万子	橋	高	堺市
木 村諷子 水割で今日の疲れをのみほして 単和田市 福 島			寡婦にな]]]	仙台市			記	理屈など要らぬ荷台の子と話し
		福					して	水割で今日の疲れをのみほ	村諷子	木	鈴	鳥取県

鮫虎狼

柳五郎

弥、

潔

せつ子

実

水 煙 抄

前月号から一

舟 木 与根一

謎を解く鍵が怖くて差し込めぬ

が上手く表現されている。 この人の宿命、と読んだのはひが目か。心理 たら、これは恐しいことだ。然し開けるのは 吉か凶か。その鍵を自分が握っているとし 佳雲

点数を稼ぐ尻尾がちぎれそう

それを悠々と達観している作者に拍手。 愛いが、人間さまの尻尾は失笑ものだ。 り族もまた後を絶たない。大の振る尻尾は可 世の中に権力者が絶えないかぎり、 胡麻ス 刀水 だが

失敗を気にしているな よく喋る

居れない焦燥感、喋りまくることによって自 し作者はそれを冷静に見詰めていた。 分を紛らわそうとする。よく見る情景だ。然 なぜこんな失敗したんだろう。じっとして

めぐり逢い開けてはならぬ玉手箱

玉手箱はよかった。 代の初恋が甦る。だけど幸せそうな彼女、あ のときのことは胸の奥深く仕舞っておこう。 小雨が降っていた。あれから幾星霜。そして 仲良しだった彼女が転校して行った日は、 人妻となったその人との出会いに少年時

人妻の膝が動いた隙間風

奥さんに、ちょっぴり浮気の虫が住み着いた の警鐘だ。中の七がよく効いている。 としても不思議ではあるまい。世の亭王族へ のってる頃だ。仕事と家庭、 の僅かながら隙間らしいものも出来る時期だ。 三十代の奥さんだろう。旦那も仕事に油が 夫婦の間にほん

漫才で笑い飛ばせぬ時期が来た

る道、くよくよするのは止めよう。ここは一 元の漫才夫婦に戻ってほしい。 番、うまく切り抜けて、せめて余生ぐらいは れとも家計のピンチか。夫婦ならいずれは通 この夫婦、何年目だろう。倦怠期かな、そ 朝山千世子

内幕を知らない男の大あぐら

ないのもこの手の人種だ。下五句に見た。 何も知らない癖、他所さまで主客転倒しかね 世間にはこのような無神経な男が案外多い。 次の三句の軽妙なタッチは私の好みだ。

ステテコの補欠外野を守らされ 北浦

メンバーが足りない、そこで急きょ応援席

から動員された。上五句がそう言っている。 昼過ぎの電車とんぼも乗ってくる

り走っている。下五句が楽しい。 ゆったりした車内。心なしか電車もゆっく

村長は途中の野良着とよく話す

何故だろう。稲作りの講義に花が咲く。 村長さんとこの田圃は出来が良くなかった。 次の五句などは川柳の醍醐味であろう。

雑談の合い間にきっちり飲む薬

慢性病がこんな淋しい習性を身につけさせ

売れてない店へ西日が強すぎる

たくなる 益々鮮度が悪くなりそう。 いよいよ遠慮し 西村かすみ

洗濯をたたんで今日をしめくくる

息が聞こえる。 良妻賢母の詩だ。旦那と子供さんたちの寝

結婚をすると女の謎が消え

あれ程に臍曲げてれば寂しかろ そうですそうです、やはり普通の女です。

はそれ程に一。 あなたには、 優しい思いやりがある。相手 宮崎シマ子

まだ数句拾い残した、 お許しを乞う。

n

知

da

ま

主間

義 言

限

度を越 てはおれ

えた自

課

限 民

度

0

82

軍

備

回天子

度三度

度に耐えたしたたかさ

棒

限限 限

度度

を守守

る妻 ふくれ

でよし

ふ佳倫

ひろ子

つゴつ消衣辛二

防

0 住 t

限度を

限度一ぱい意地で伸び変の限度に母は佇ち及を知らぬ高いビル

テ

ル

長寿者の秘訣は限度コムバンド限度一ぱつき放す愛の限度

版度越えたと見せ ンド限度一ぱい意

せる下心

限度です

と言われてからがうまい

不

佳

限

度

白 岩 文 衛 選

限界の風いない。 船ひらりと身をか 限界 が限度と女の 欲をみたすにせまい 知 度を越えた親 0 た日を 切さ 土地 わし 山伊重宵里三柳久志人明風和子 人明風和子山々水水

軸忍の限度を表がサイン出す を振る妻は限度をおきまえず に得る限度へ沈む夜のグラス が得る限度へ沈む夜のグラス が得る限度へ沈む夜のグラス が得る限度へ沈む夜のグラス が得る限度へ流む夜のグラス が得る限度へ流む夜のグラス 柳五郎 浪速子 登美也 文可 fili 平住

金従界 情 への内 to 限限 限 度の 人度 ٤ がが 役 めか あると妻 ほしい 人の無駄 み動

物

価

高 L 10 酒

から

言

う

き出

ひ宵凡太郎

使

すみれ

公

素身郎 あき子 木魚也

同年忍限

リハビリへ限度ぎりぎり挑む汗亡 夫 憶 う 私 の 心 限度 なし底 がない 勘忍 袋を母は持つ底がない勘忍袋を母は持つ

\$ う 既 12 限 度 ば 13 海 水 着

枯弘芳

梢朗

向寸 えて いる限 度 たばこの 輪

マスコミに限度はないかまだマイク 与根 規不風

歩す

木橋渡ってならぬと書いてある る杭は打たれる限度も読んでいる

度

n

た女

胡頹子

う

度 3

感じて

からの父

度 忘

を小声

限度とは知っているけど意地がある

口 ЙĤ

伏 見 茂 美 選

景冬来景景景只景景あ籤景景 景 景品つきをよく知っているテレビッよそさまへ豪華な景品みな当 チンコの 品品品 品空場 品品品費品品の運品品 に時のがを のに 者 00 を渡 1= うは 0 列で迷子の名を呼ば並んであめを一つ当 魅力 貰っ 特 お 少 へ洩れなく進呈記 景 0 時 商売人のが はずバイトの III nn nn 景品欲しさにえらい では下い た金魚が生きの 12 下 さえ 1+ は外一列苦に足に つも当りそう に子はす 宿 用が足 文句言 t を を 表 念品 ta 7. 3 売 U る う 1) n 7 1) 3 ち 1 3 みどり どんたく 凡太郎 七面山 哲 不幸実 夫子 住 男

が客

との

の内

会

市

町肝をた

っ招喫

玉び茶

な玉は

じく

ならず

路

景品を引いて無口も名が 景品はみんなに当るレクリエー 景品のマッチに書いてあ 見てる方が楽しい現金のつか 夏田 がはしさに子等の買う 景品が欲しさに子等の買う 景品がはしさに子等の買う 景品をもらえるだけの品 景品の単に景品黒字とは 景品のサイズは社長の出 景品のシャベルで秋の種 景品のシャベルで秋の種 景品のシャベルで秋の種 れで儲かるから不思 m黒字とはならざれているだけの品を買. と言う 品うえつける てあ 1 10 値 ヘラグリ かみ取 1) ナラシ 頭引 売 ション な 下世 Vi いげず 1 久回四義三本洛大木あゆう春武は に天 於子郎美吉棒酔柏魚子也峰日水め

から

等

を

7

福

幕

を

き

洋

無 愁で t た ま 景 品 当ててくる

景

H

勝

3

拍

手

を浴

U

3

E

1)

頹

景

H

から

60

40

重

U

忘

年

会

河 茂 雄 選

一回天会 肩亡後骨肩苦撫肩野肩定 組むと歓 で替仏の年 替りして旧恩に超いる子の温くみに惹かれる子の温くみに惹かれ 肩 0 (収声上げたくなって√なって)場に夢二恋をすめる。 荷 妥協 から 寸 Ł 重 0 峨 肩 ž 芳 枯 軒 胡 11 太楼

木素道早魚郎子苗 肩肩 荷 0 生 重 2 0 b を妻 父肩 美人 行 は幅 の肩 へ夢を 円 < 未亡め合 心である ならく 10 大多 IĤI 肩 大 書 A

景景景旅景 品品品先品をは 出社つのも

6

1 て 掃

1

1

出

佳みた

品気にいる

6

82

組

て男の

用

か

落

ち

17

てくる

店主

種を蒔

撮

3 除景

> 1 H

to

かく

社

長

大の

1)

は貝ので値に

札

0

1+

分も

出

7

L 替

ま掛け

三五島 17 右北肩母撫屈母肩鉢反肩謝二肩肩 肩風車ので辱の車巻対のつ人のの 何のに 山だ 肩子での荷でして 叩は足鉢の仕て 肩肩の肩 手荷 7 用 を 向うと肩がこってにんだん丸くなってにんだん丸くなって ハラ 分巧下 佳っ 重舞 先 1) 頼 卷 1+ た 明 ż 1) 6 L ば 11 文肩方の ば H 不ときを 7 1 80 つ月 か私 7 肩 面 づが こってく わは 1 い娘に育ちいないは旅に出るのない。 許され fi を呼 傷する で い で くる ぶ +

ど空雑肩確んに草幅実 でのに 底の肩を見せない父の意とどくかと思った父の肩 広さ 友 終る信 * [74 男 じてう + 0 用 用 ち から 2 田田 落 な 17 to 3 3 車 規不 風 那 朗 風

抱 J. 0 VI 1: 肩 H に残したくないも 111 もあ 界 る妻の 肩 採 まされる かり はつ絵 1

見 F 7 40 th 肩 址 寿 馬

0

付

8/2

名

刺

0

<

か軸

49

子美

和步数室

題 気移り

本田恵二朗

なぜ佳吟なのかと訊ねたら、意味は判らぬが 吟らしいと感心する柳友が現れたので驚いた。 何かが伏せてあるらしく想えるからだよと言 ってしまったのである。ところが、これは佳 になってしまって、われながら解らぬ句にな で、それをやってみたもののクイズ張りの句 には暗喩法を駆使せぬことには要約出来ぬの 来た。十七音字という小さな皿に盛り上げる 解らぬ駄句であると手きびしい批判が返って 作り上げた句を柳友に見せたら、句意が全く 七音字に要約してみようと脳味噌をしぼって どの随筆らしきものを書き上げて、それを十 三年ほど前のことだが、原稿用紙二枚半ほ 人間の感受性の多様さだと思っより外は 同じ作るなら解る句を作れ

> 月をかけて身につけたマイペースを温存し、 が自由であるかも知れぬが、私自身は長い年 界の現況と言えそうだ。そのどちらを走ろう という主張とが平行線を走っているのが川柳

気移りへ庭一ばいの花盛り (気移りが庭一杯に花咲かせ 房 7

気移りの態度が妻の勘にふれ (気移りのそぶりが妻の目に余り 風

鈍夫婦気移り知らずで共に老い 気移りはすまい貴男を信じよう

気移りを上手に誘う百貨店 (気移りをおびきよせてる百貨店 (凡夫婦気移りなどは知らず老い

気移りをすすめるようなメロドラマ (気移りをせよせよせよとメロドラマ) (気移りをそそのかすようなメロドラマ)

気移りが呉服売場に遊ばせる (気移りのサンプル見せるメロドラマ) (気移りの仕方教えるメロドラマ

やすお

投句先

気移りを芸のこやしにする女 (気移りが呉服売場の虫になり)

ウインドで気移りばかりして買えず (気移りを芸のこやしに女優売れ

美智子

(気移りをしにデパート通いする

という主張と、同じ作るなら解らぬ句を作れ

なさそうである。

それを愛し続けるであろう。

場

岡

山県邑久郡邑久町中央公民館

国鉄赤穂線邑久駅より歩い

釘

日 第16

時

昭和57年1月17日

日

9時開場

出

Ш

県川

柳大会

童

安らぎ

田中

俊平選 薫風選 好啓選

去来川巨城選

n

句昧地 広

特別課題 当日一題発表 (全部に呈賞 題 当日一題発表

奇童選

森中恵美子選 繁夫選

一、〇〇〇円(発表誌・参加賞

会費

投句規定 縦22センチ、横4センチの句箋 日必着のこと。 投句料五〇〇円を添えて1月15

〒七〇一一四 応募作品は各題一人2句以内

高山県邑久郡邑久町山手一一 六

県知事賞外総合十位までト D

呈

白百合川柳社

	凡太朗	気移りの証拠を妻に並べられ	瓢太	気移りがして決めかねる嫁選び
	同	気移りな心が見えて目をそらす		(震度一ほどの気移りなら赦そう)
	元江	気移りの黒い揚羽が花を追う	[ii]	五分ゆれた気移りだから赦される
	间	気移りをあふりたててるコマーシャル	寿子	気移りの肌へ鐘紡資生堂
	みつる	気移りな株に手を出し大火傷		(気移りを止めたらめっきり上達し)
	[ii]	将を射るつもりが馬に射止められ	同	稽古事気移り止めて上達し
	利美	値切るだけ値切り相談して来ます		(有り過ぎる品に気移りさせられる)
	[ii]	気移りの女へ商魂ねばってる	貞子	品物が有り過ぎ思案まとまらず
	三千代	いたずらな風が気移りさせに来る		(止むを得ず気移りをする子算額)
	同	気移りで離婚重ねたわけでなし	[11]	気移りを止むを得ずする子算額
	兼治郎	気移りの自分を自分でもあきれ		(気移りを宅建業者に見透かされ)
	[ii]	気移りのパートにやっと腰据える	保夫	気移りを宅建業者すぐ見抜き
(中七二) 本田恵二朗	公乃	気移りの指へダイヤが醒めてゆく	同	札束を見るとギャンブル気が移り
宛先 岡山県倉敷市下津井一—九—三四	同	移り気な男へ夢は描けない		(気移りがまたはじまった旅支度)
題—真心—12月20日締切(2月号発表)	胡预子	好日を閉じる気ままな梯子酒	芳水	気移りが始まりちょっと旅支度
	ふみ	気移りは男か女か秋の空	同	高級品買うて気移りしたくなり
欲望の気移り運が背を向ける 同		(気移りが過ぎて婚期に見捨てられ		(気移りもせず銀婚を迎えけり)
命賭けた道に気移りなどしない同	[ii]	気移りが過ぎて婚期の外にいる	三五島	気移りもせずに銀婚式となり
気移りへ通した意地は捨てている 佐代子	武太	気移りが過ぎて買物せず戻り		(この親にしてこの子あり気移り屋
ドレス選る女へ鏡あきてくる同		(気移りをする暇もなく共白髪)	る同	すぐ気移りする子でこの親ありと見る
気移りな客へ手早い美容院	[6]	気が移ることもなかった老い夫婦	千子	気移りを甘やかし過ぎとなすり合い
玩具屋で孫あれにするこれにする 英子		(古唐津の気移りさせぬ彩と寂び)		(気移りの真似へ貴男は笑うのみ)
気移りへ呉服屋見せる品へらし同	[ii]	古唐津の気移りもなし彩の寂び	[ii]	気移りをしても貴男はいてくれる
気移りが強くてものにならぬ趣味 武 水	義美	気移りがしないうちにと式を挙げ	山久	好きだから気移り少しゆるしとき
気移りはしないよ君がいるかぎり 同		(タイ売場柄多過ぎて多過ぎて)	護)	(気移りなこどもばかりにした過保護
気移りを咎められてる経机同	[ii]	ネクタイ売場柄多過ぎて選びかね	[11]	気移りな子どもになってきた過保護

第三百六十五回 (五十六年度第十一回)

大 萬 JII 柳

柱

入選発表

投句総数 Ш 四 三百三十 好 句 郎 旬

帆柱のしなりゆるやか今朝の海 マイホーム柱さわれば血が出そう 大阪道

大黒柱父権と共に細くなり

なんでもない時に茶柱立っている 八尾美幸

思い出はもたれて泣いたこの柱

まあまあと宥められてる鼻っ柱

両親と大黒柱があり故郷

鉄柱が秋晴れの空また縮め

Щ

柏

丹

馬

茶柱を信ずる母へ逆わず

利

美

門柱の名刺も寂びて仮住居

八尾シマ子

定退後大黒柱やや細り

米子 雄

17

主義曲げず大黒柱としての自負 Ш

柱時計たまには黙っていたかろう

寄り添える柱があって生く女

鳥取

The second

杖

百年の歴史柱の艶が知る

米子みど里

和歌山

寿

子

ご先祖が植えた桧で建つ柱

大 阪

智

子

芸術として氷柱に血が通う

大阪

君

子

三代目抵抗がある床柱

富田林

花

梢

身の程は心得ている床柱

ピエロ今日床柱背に坐らされ

子育ての昔を語る柱傷

倉 敷 三林坊

鉄骨の柱残して倒産し

今 治

有

里

傷だらけの柱我が家の父に似る 東子悠泉

歴代の手垢柱に生きつづけ エプロンの母は我が家の補助柱

柱時計三代目の音で鳴る

美

111:

床柱に背中の汗を見られてる

変らない友情杖とも柱とも

寝屋川 英王子

床柱今日はめでたい艶で映え

和歌山 登志代

大阪凡子

芯柱重荷に堪えている誇り

柱穴が語る太古の佇まい

黙々と梁を支えて明日に生き 庫 捷

阪

東大阪 綾 珠

大阪文秋

こけそうな柱を支えてくれた妻 大 田 軒太楼 木曽の宿ロマンをしのぶ床柱 電柱の蔭にたたずむ白い杖

柱キズ竜馬の無念まだ疼き 人柱埋めた秘話持つ橋が朽ち

鼻柱折る日をライバル狙ってる 柱背に考え込んだ日のひとり 床柱夢見て北山杉伸びる

鍵握る男は床柱を避ける

北炭のあまりに酷い人柱 和歌山 登志代 杖

胡頹子

12

52

栄枯盛衰大黒柱は無表情

阪

好

天 1

句

それぞれの分を守っている柱

地 美

幸

電柱にしがみつき 知 吉

落選のポスター

選 者吟

柱にも紅白を巻き祝い酒

表札がかかると柱重くなる

di

人ノ句

(17)

橋

貴

37. 昭和五十六年度

人間の醜さを知る床柱

ノ句

坝

まつ子

君 花

子

大阪 富田林

坝

0.0

和歌山

七五五 七.五

登志代 満津子

和歌山

Ξ ベストテン(十月現在

八 好

一 五

版

知

UL

和歌山

Ŧi.

[/L] みど里 秋

大 Pi

九 九

以下略

南海電鉄句会

H 時

O Hi

場所 題 十二月十七(木)午後六時

暴れん坊・行きがかり・ チャンス

南海会館ビル本社地下食堂

柳塔社常任理事会 (11月2日

III

塔守る柱は風に逆らわず

江・薫風・酔々(出席者) 栞・好郎・紫香・水客・潮花・形(出席者) 栞・好郎・紫香・水客・潮花・形

▽議事並に報告事項△

社発行とする ★堀江正朗・芳子句集「二人三脚」 は川柳塔

進する。 ★川柳塔参事各位に協力を願って新企画を推

★川柳塔二百号記念川柳大会と特集号に関す ★新年おめでとう会に関する件。

(記録・酔々)

▼12月の常任理事会は1日 火

甘うなり むかれて 標八种 (不好)

道

R運動を

川柳の

しいのは古川柳(末摘花を含め)ぐらいの知 けてきましたが、近頃は、 板を掛け、 日の傘寿を記念して、裏のコンクリ塀に掲示 識しかないことがなさけなく、 ありました。 通行人に「道標」として訴えつづ 川柳と言えば諷刺か諧謔、 立ち止ってメモし 今年六月十五

場所をもっておられる人は、 てもらったらと思います。 て帰る人も見かけます。(毎日曜に書き替え 同人全部でなくても、 通りに面した適当な この運動を拡げ

同人の某氏より薫風氏へ次のような私信が

吉田 [圭井堂氏を悼む

几 尾

栞

氏は大東金属株式会社の社長だったから、 来ず、十一月五日二時の告別式に、好郎氏と を完うされた弔辞の数々は、氏の生前の努力 も盛大に営まれた。氏は八十一才という天寿 葬で堺市寺次町の善僧寺でいとも厳粛にしか 私と二人だけやっと駈けつけることが出来た。 報せが大変遅れたため、お通夜のお詣りも出 塔社参事、畏友吉田圭井堂氏が急逝された。

絶えがちであったためである。 ここ数年間句作から遠ざかられ、 御逝去の連絡の遅れた理由の一つは、 又交遊も途 氏は

と勤勉を讃える言葉で終始した。

湯の郷温泉のたつみ荘等々と年一回の素晴し 鳥羽の答志島、三方五湖巡りの小浜の青濱館 を作って、山代温泉の旅館十万石を皮切りに 栞の連中が、柳々会という名の旅行グループ 多久志、好郎、静馬、形水、小松園、故梅里、 昭和四十年頃は、同じ年頃の者、圭井堂、

> どると、もう一度柳界へ再起してくれていた 氏はお話が大変上手で、毎月例会の柳話を度 らと思う。謹んで遺句を列記して御冥福を祈 々面白くきかせてくれた。数々の思い出をた い愉快な旅行の思い出はつきない。そうそう 幽霊の話や、桜の話、選句の時間分析等

遺

ほどほどの濁りがあって魚が住め

嗚呼 方大さん

藤 # 春 H

やよ方大汝人籍はく奪す 日頃から健康で人柄も謹厳な先輩を亡くし

方

大

礼を致したことと悔んでいます。方大さんは 去る八月二十七日ご他界なされました。 会なく、思えばお世話になった先輩に全く失 心から哀悼の意を表しています。私も毎日の 通院生活で、最近故人とも親しくお話する機

> 先見の明も努力も運にされ 家元を継いで素足をもう見せず 胃袋で薬同士がもめている 立ち遅れなどと年中やっていて 盗泉の水をがぶがぶ飲む時世 食通も最後はやっぱり重湯なり 吞舟の魚は疎で洩れ密で洩れ 落ち着いて聞けば隣室は父娘なり 福引で来た温泉のぬるい

> こと

なことです。ご冥福をお祈りするのみであり す。川柳塔社にとっても惜しい人を失い残念 に入院、食道瘤膜を起し御仏となられたので 方に向っておられたところ、突如六月十三日 年七十一才)肝臓疾患の治療に通院され、

ます。合掌。 辞世の句 常智院朗照方大普覧居士

黒枠の辞令天から届けられ 川柳塔八〇〇号が見たかった やよ方大汝人籍をはく奪す

方大句抄

県人会検事が酒をつぎまわり 十八貫社長の前でみじめなり 生活に負けた帽子のかぶりよう しゃべらない方がチップを置いてゆき 家みなマージャン狂にした後妻

柳 界 展 望

原稿締切毎月末

集録·香川酔

.

H

to

橘

高

H

以 遊

商社居

橘亀山

秤(は

かり

ĝo

鵜伊

・片 朝

> 会場·吹田市立北千里地区 日は 車千里線北千 公民館2階会議室 選者 で開催 車 月 6日 di (阪急雷 言され 12時

集 (第2集)を 入用の方は、 たらよい 27 ± 主催 耙質会が、12月13日行われ れる予定である。 各題2句 大 新陸 聞 111 柳文学社 . 会費干 広瀬 久保 五百円。 反省選

可会は、日和山川柳おとひめ共間・豊岡川柳天 盛大 百有 n く日川協常任 . 特集を行った。 創立3周年記念川 た 橘高薫風氏は、 理事に推薦さ 今般新 柳大会の

余名の

柳人が参集

乙姬莊

にて、

所催され

.

和

八尾、

堺

の百

柳 H H

大会は、

主 ■ 関 川

柳天主

[3]

■川柳新京都はNo.19号で、

しょう。

近氏へ申れれ

たっ

十込まれ

入選句

3

56 D 柳

7

催

惟カニすき句会は、王閣・瀬戸川柳おと

余名の作家が集まり、お のの特色を十分発揮で 林、大阪各市 それぞれ の文 寝屋 円れ PH 0) . の新著「川柳公論」 から応用まで」が発刊さ 四六判 周出 川柳作句配社の尾 · 並製九八〇 の教室・入・経藤三柳氏 三柳氏

一塊人氏追悼川柳大会 らしいこと である。 . 25周年記念大会の特集 山内静水氏の情熱

П

3 面 に横 溢

仙 由 誌上合評会は、 会 -前柳 であった。 111 大賞 受賞 有意義な企 句 回 のに関する 111 協

恭太選 蟻朗選 無風選 北選 瓷 . 刊の企 年記 和 番 号まで番傘誌上に掲載 続 38年1月号から56年8 番 傘 念行 川柳 傘 **土類題別** 画 が進 事 0 行 万句集》 環として 中である 1創立75

-青森県で開催と決定 昭和5年6月第2日曜日に . 111 第3回 第6 柳作品 月22日出雲市民会館にて 回全日本川柳大会は 出雲市川柳大会は から選出される。

盛大に開催された。 市)各地大会の柳話でお疲 V V 同人・ 好郎 柳友消息 [6] 理事長 高

でとう。 に女のお孫さん誕生。 酔夢さん (香川 お 県 3

根▼県堀 また子供が生れてくるよう 行されるので、 堀江正朗·芳子ご夫妻(島 から 「句集が近く発 久しぶりに

いる編集 堀

th 市立 to 日中柳 大学附属 51 杣氏 後 時5分、 iti

るが、 00 は東洋易学学会の権威であ おいて理事に推薦された。 本規不風氏 今回学会全国 京 都 thi

雑時代御活躍された方であ ▼伊集院良氏 る 取県参議院議 め、大忙しいとのことであ V [n] ご健闘をお祈りする 村 尚武 員 (大阪府) の補 取 選 市 のた Li, Ш

高

本名

鬼遊

看板、

題

腐

足是某

Ú

7 カ月 て活動されることになった。 るが、 なされた。まず塔誌友とし HI 余の入院加 hii 今回川柳活動 方大氏 (倉敷市)二 がを再開

ている。 告別式には栞主 く8月27日死去され ₹ 副 月4日死去され、5日の ·吉田圭井堂氏 理事 長

く快癒されることをお祈 ▼若本多久志氏 (西宮市) 内障にかかられ静養中と H

か 弹 5 20 ti 便 1) 11

病院で死去さ 大阪

大会に

まことにご同慶の至りであ

場 = 所 .

菜の . 句

花 会

12 月 西 郷会館 10 句 会 (木) (八尾 47 神 時

大阪風景 南 大阪 椒

療 の甲斐 t. ・12月19日(土)・14所・寺田町高松会館 エンピツ、 意気込み、疑 おにぎり。 会 50 時

が参列され 以 (大阪市) 幹代行、好 た。 ■東大阪川柳本 兼題=米、頼 ・東大阪川柳本 . er. 堺 H

もはや 兼

る

とのことである。 尼緑之助氏 陰同人会の結 成に努力 出雲市 141 11

境内 兼 曲

111

頼る、 中央公民館 土) 夕6 機嫌

民会館 白堤、 火 移 時

3

月 句 会

会 H 場 午 金 属 後 会 時 館

弱ながらスチームが通っている。司会の柳宏 報告され、全員黙禱、ご冥福を祈った。 子氏から吉田圭井堂氏死去の悲しい知らせが 今年は冬が早いようだ。会場には、 もつ微

よく通るテノールで披露された。 が…」と言われるとおり、川柳雑誌時代、企 は冗談?で、「話をするのは苦が手ではない もノドを通らなかった由だが、おそらくこれ 名を受けて以来、夜もおちおち眠れず、 「や諸行事の推進に活躍された思い出話を、 今月のおはなしには上田翠光氏が登場。指

好

これまた堺市の藤井一二三氏が獲得された。

初出席は堺市の久井富子さん。月間賞は、

紫風花雀人

-柳宏子、記録-鎮彦 受付-与呂志·重人)

出席―翠光・与呂志・雅風・千万子・勝美

乱れてる心は妻で落ちつけぬ 逢える日の鼓動の乱れかくせない 心電図心の乱れ知られそう

子・柳宏子・度・酔々・楓楽・喜風・君子・ 平・喜一郎・悦郎・瓢太・川狂子・射月芳・ 江・旋鳳・寿子・薫風・吐来・鎮彦・重人・ 涼一・萬的・洋敏・智子・文秋・一二三・吸 眉水・善紫・綾珠・山久・トメ子・史好・英 太・柳伸・紫香・静歩・栞・水客・富子・甘 英壬子・太茂津・規不風・頂留子・形水・武 鬼遊・敏・蘭・美智子・千代三・雀踊子・健 司・潮花・右近・憲祐・滋雀・桐下・好子・

> 年質にも筆の乱れを知った老い 不吉な夢見た朝心乱れてる

Ш 本 桐 下

凡九郎・岳人。

達筆から乱筆ご免の手紙来る 雪しんしん列車が乱れた駅の朝 北風が憎いセットを又乱し 乱れても菊の素顔にある気品 乱れなど決して見せぬ修行僧 少々は乱れる心算の宿の下駄 秋深む菊の乱れに思う人 乱れない酒で常任理事にされ ひたすらに乱れを知らぬ砂時計 言い勝った呼吸の乱れが隠せない 豆腐屋のラッパ乱れている冬至 乱れ篭むかしむかしが懐かしく 一杯のグラスほどよく乱れだす 一合の酒で乱れる父達者

> 寿 涼 萬 子 一 的 千万子 江 美智子 子 蜜蜂の稼ぎに乱れ咲く花よ 乱れ篭女の自我が捨ててある 乱れても乱れても写経のひとすじに 出棺に少しみだれる妻でよし 合掌に心の乱れをととのえる 又今日も荒れてるらしい靴の音 丙午女は乱れてはならぬ コンパクトだけが知ってる乱れ髪 乱れ咲く萩に女の性を見る 倖せの真っ只中に居る乱れ 語呂乱れそろそろ本音出そうです 電話器を置いて心が乱れてる 職安へ過去の乱れは伏せておく 乱気流男はバンドしめ直す 早朝のダイヤ乱れる時限スト 背信に心乱れて定まらず 伏兵に気付き乱れる雁の列

> > 凡九郎

太茂津

規不風 吸寿善雅潮滋岳 敗北のおろかさを知ってきた乱れ 乱れてる荒れてるみんなに見られてる 美しく乱れてピカソの絵を愛す ポプラ並木と一緒に少し乱れよう

交番の前では乱れないように 乱れ咲く菊に鋏の手が迷う 父の酒すこし乱れて悲しいか

> 与呂志 太茂津 雀踊子

くさめした時からペース乱れ出し

コスモスへ蝶は乱れるように舞う 蜘蛛の糸乱れたまんま冬の音

千万子 雀踊子

柳宏子

荻田 千代三 選

そそり立つ山へ心が空になる 山彦よ向うの僕もはずんでる 山道に捨てた男の下駄がある 山奥のこんな所に一軒家 山に来て山の高さに満たされる 邪心持つ人は山には登れない 修業僧へ山は真赤に夕焼ける の山があちらにもこちらにも 美智子 君岳紫翠

山は夕焼け若さの歌が吸いこまれ 冬山へ軽い装備がくやまれる 開発へもう山のない村になり 野心ない炭焼く父の山がある

川 吸 眉 岳 萬 武 潮 雀 滋 勝 涼 狂 子 江 水 人 的 太 花 子 雀 美 一

鈴の音札所の山は凜と冴え 飛鳥路は時雨に暮れる山三つ 山芋をつるつる風邪の口に合う

山男トマトのような陽を拝み山の絵の向うはきっと冬である山の絵の向うはきっと冬である 山裾の家並さびしい灯に暮れる 男こだまが好きで山に行く

Uターン 故郷の山がそこにある 塵のがれ山あいの湯に浸る 好きの娘で婚期遅らせる 男妻の祈りが背なにある の色はみどりを引きたたせ の吹雪が唄う炭坑節

川狂子 憲酔洋楓山

足弱なママに合わせた山へ来る

友吞んだ山とは見えぬ茜雲 母達者らしく故郷の山が照る 大和路の山はまあるい影をもち 山道のりんどう田舎の娘が浮かぶ タンフカー 男山の機嫌に逆らわず **一猿の礼儀知らずへ深む秋**

雀文涼綾 踊子秋一珠

傷心の私を山も海も呼ぶ したい事山ほど置いて山へ行く 夫婦して山の起伏の息づかい 誰よりも神を信じる山男 中腹に灯があり人の住むらしい山ふところに抱かれて老いる母で ふところに抱かれて老いる母である の詩はきれいで空のように澄み

滋鬼翠君右雀遊光子近

千万子 太茂津

千代三

満 選

灰わかめ淡路みやげとおすそ分け ボンペイ人の鋳型作った火山灰 ICの世に桐灰は生き続け 煉炭は灰になっても穴並ぶ 蚊取線香灰になっても渦を巻き かたくなな母に大事なカイロ灰 あくせくと金を残して灰になる 死の灰の恨み重ねて原爆忌

灰皿に迷う思案が山になり 灰神楽そんな喧嘩も語り草 香炉の灰は静かに捨てられる ワラ灰がはいると里は冬仕度 与呂志 射月芳 英王子

弘甘眉 生平水 智 幸 子 一 どんたく

> 灰になる弱点を持つ人間味 式前夜思い出そっと灰にする 籾がらの灰に生きてる土人形 死の灰をおびき寄せてる核の傘 骨灰で仏像作る一心寺

吸殻の灰を見つめている詩 線香の灰に埋めた罪ひとつ 焼跡の灰にしみこむ涙雨 天国で花咲爺灰を撒く

母の骨拾う灰が温かい 吸殼の灰から女の物語り 一握りの灰になる日はキッ

雀踊子 規不風 重桐酔岳楓勝吐綾 F 12 人楽美来珠

堀江正朗•芳子夫婦句 集

二人三脚

題 夫婦の句、 刊行子定です。 昭和39年から今日まで、生活即川柳のご 千九百句を集録、 12月中旬に

画跋序 橘高薫風 中島生々庵・

直原玉青画伯

価 判函入り・三百頁

A 5

二千円(送料共

柳

発行所

社

やきいもが灰の中からコンニチワ 老いらくの灰かき分けてみる火種 花咲かす灰をまきたい枯れた胸 灰となるいのちの果てを写経する 灰になる時も女は美しき 桜島大根ふとる灰が降る 灰になるまで人間臭い紙幣である 灰になるまでは愉快に暮そうよ いつの日かわたしも灰になってゆく 灰に書く文字は女を捨て切れず ダンヒルの灰は豪華な皿に落ち 病名もわからんままに灰にされ ワラ灰の温みにも似た亡母でした 灰になる時も化粧が要る女 おはら節唄うと灰が降ってくる ーンだけ残して灰にした油断 太茂津 美乙女 美智子 静步 与呂志 柳伸 千洋涼弘 代 敏一生 醉 134 敏 雀

井文 秋 選

天高くマイクが通る献血車 ひやかしにも馴れてあの娘の通る道 いつもの人通って無事な今日暮れる 弘. 生 水

> うれしい日うどんがするり喉通る 目の前を通る幸せ見えてない 通せんぼ人は迷路が好きらし 意地通す女の視野がせまくなる 鼻筋が通り不幸がつきまとい 地下鉄出ると幾何学的に風通る 議通る後援会が道を開け

ワンマンが通ってからの苦笑い 鼻筋が通って石仏親しめず 天皇旗迎える旗の波がゆれ 通す通さない私有地もめにもめ 草木伏す回峰僧の通る道

要求が通るとバスが動き出す 苦労させようどうせ一度は通る道 金積めば無理がすんなり通る裏 お地蔵の前を素通り出来ぬ母 近道を通れば大に怪しまれ 染めあげた泥の匂いを手に通す

若いのが通ると街が生きてくる 好きな人が通ると風が暖かい 歩行器のお通りお客も道をあけ 知りつくす妻が通した下手な嘘 道修町通ると虎が首を振る どこ通る聞かれて用がひとつ増え 通り道まだ蔭口が佇っている かげろうの命悲しく透き通る たてまえを通しストレスためている 生の願い一度は聞いてやる 岳富 英王子 射月芳 楓 千万子 楽 子祐祐

射月芳

雀踊子 美智子

に上田翠光氏が洩れていました。

お詫び

11月号掲載の56年本社句会全出席者名

致します。

太茂津 凡九郎

水右

富柳会忘年会

12月6日 10時30分桜井駅北口集合

七千円

千万子 伸

В 関西の日光といわれる多武峰にて

どなたも熱烈歓迎 賑やかにやりたいと思います。 ぼたん鍋を囲み、今年の年忘れ

を

窓口一岳人まで。

千万子

悦 潮 柳宏子 翠

郎

若 柳 潮 花 選

題

欲無限 上向いて無限の空へ亡母を画 数学の無限学者にまかせとく 慕情無限泣いたうなじにある白さ 五線符のオタマジャクシにある無限 可能性無限産声たしかなり 父と子の凧に無限の空がある 陽は無限雑草明日へ這い上り 地獄の深い深い

涼楓桐

規不風

弘、

抜け出して無限へ走る流れ星

仲間だけに通る言葉でフリーパス 悪知恵が罷り通ったオンライン

史

好

留子

遠慮通り越した無礼と気がつかず よく通る声で囲りを黙らせる 糸通してあげて若さは口にせず 街道を通ると歴史の風にあう 針に糸通って笑顔とりもどす 議決には負けたが筋は通しとく

洋君

子敏伸

限りない大悲に悪もまた栄え がき大将無限に遊びの知恵を持つ 児の画展無限の視野があふれてる 引き出しに女無限の噂持ち 秋空無限塔の九輪の金光る 句は無限わたしのペンは動かな 妻の愛無限と信じていた不覚 エプロンの白さ無限の愛がある エゴとエゴ無限地獄が待っている 親の恩無限と言って不孝する 無限から無限へ続く波の音 離婚した夫婦で無限の距離がある マイコンの無限へ火星の土地を買 絆の無限を知った血のぬくさ 素晴しい星に無限のある打算 倦怠期ぐちは無限に湧いてくる 手を合わせ命の無限信じきる 女三人無限に続く立話 なんぼでも金あるように子は思い キュー 枚の紙へ無限の思想書く 億を貯めると二億欲しくなり 間国宝の前に無限の道がある ピット無限の愛を誓わせる 40 U 与呂志 雀踊子 郎 美智子 与呂志

風

悦健

呆気ない時間夫婦になる誓い 反省の時間も温い共稼ぎ

司

限りなき悲しみ妻へ喪があけず

吸滋

大 坂 形

水

潮

花

共稼ぎ時差がネジ巻く夫婦愛 時間割通りに男旗を振る 時差ぼけを土産に一生一度旅 めしを食う時間になってめしを食う マイホームパートタイムに負んぶする 題

夕陽が沈む走り去ろうとする時間 頓服をのむ時間を妻に起こされる 母と子の時間にオモチャなど要らぬ おかめひよっとこ時間忘れて踊ろうよ 逢う時間忘れ角帯締めている 伝言板待った時間を書き残し ゆりかごの中から時間にしばられる

喜形洋雅

悪友の演出悪友の時間なり 時間まだ少しあるので揚げを買 持ち時間残してふかす煙草の輪 手術待つ廊下時間が凍りつく 仕舞風呂主婦から妻にかえる時 時間に追われるチビた靴である 親と子でだんだんずれてゆく時間 大好きな先生が出る時間表 手術待つ焦り時計が動かな

岳甘史

好

善鎮

海女となり無限の海の視野を持ち 両端をつなぐと無限に回りだす 釈迦の掌のなかで無限に跳び続け 科学無限宇宙をだんだん狭くする 赤子の手無限の夢を握りしめ

い自由へ風船紐がある

水滋萬

度

郎

待たされた時間へ吸殼抗議する 母と子と生きねばならぬ時間給 柳宏子

富

甘滋

送られるホーム時計が進まない

千代三

来

凉

一郎

どんたく F

健 岳滋 英壬子 F 雀 H 定年の背中を時が押してくる 誰も来ぬ時間を悪魔に見抜かれる 遅れがちの時計で部下に親しまれ いやなことは時間どおりにやってくる

1

司祐花江

AS

役 所 前 3 21) 2 3 4

指五本みつめて時間がすぎてゆ リハビリーの時間を妻に組み込まれ 散歩する時間と大がせきたてる 時間ですそろそろトイレ混んでくる 時間通り来て世話役を慌てさせ 浦島がうつつを抜かしていた時間 逢うときの時間を少しも疑わ 素面のとき来いと時間を貸してやる 看板へ帰したくない客が来る いつもの時間いつもの椅子がある安堵 んめいに時間を歩く試歩の 杖 射月芳 健 吸 重 吸 重

T.

形 伸

女女女女女女女女女女女女女女女女女



七字以内の句に、 原稿用紙を使用。 締切毎月末着便まで。 下三マスに雅号。

整理・香川酔々)

大坂 宿命を逆手にとってきた自信 許される嘘さえつけずお人好し 咲く花はいつも本音で美を競う 走り去る刻の流れに今がない 迎火をたいても亡父の夢も見ず 妻の荒れ模様感じてパチンコ屋 ゆく

スケッチのモデルに蝿が飛んでくる 味噌汁の辛さで知れる妻の荒れ かんな炎えバテレン塚が騒ぎだす 定期券一度も降りぬ駅があり スケッチの手を止めさせる女来る あの時の好意おもたくのしかかり よいとまけ土工の母の手が荒れる さりけなくかけた言葉にある好意 荒れた街へしっかと神父根を下ろす 右き日のスケッチブックにある素顔 インスタント式発想が追って来る インスタントラブにも神の意志がある バッタの足の折れたまま 吉右 光博山晴野 満津子 あいき 一 亜 亜 一 小 柳 弘 近

ふところが左右している人間味 山双葉川柳会 君子報 柳宏子 秋

> お行儀のわるい活字のスポーツ紙 スポーツ紙買って求人欄を見る 始発から終点までのスポーツ紙

こぼすまいこのてのひらの幸福を 児の手には明るい未来にぎってる 半月の闇の部分にいる私 行く先を定めた歩幅の太い眉 世間見る眼鏡だ何時も拭いておく 考えないことにしてますお月さま 父の道行くほど父が大きなり 厄介な話へ眼鏡拭いている 反抗へ大人の眼鏡くもってる

だと言って妙な受け皿でも困る

形

郎仙水夢

度石を廻る疲れのない

母と娘の扉が開かぬまま夜長 受け皿のない企業です命がけ 生活の疲れ言葉へからみつき その人に天の扉が開かれる 月末へ疲れたなどと言うとれず 吸殼の山に灰皿苦しそう すきとおるテッサが並ぶ皿白い

お菊さんホーローびきの皿がほし れてる足から洗う仕舞風呂

6

亜也子

オー

エスケー川柳会

大ジョッ

キ傾け大ぼら吹いて

いる

成 男 地 周

登

別れても心の扉閉まらない

チをするべ 柳ねやがわ

レー

帽に来る蜻蛉

田

博泉報

好

純粋な好意世間の目が怖い 戦争反対一億総決起 人生の終りを嘘で安堵させ 香水を選ぶ女は妥協せず

三千子

久風生念成鈍途路 泉 スポーツ紙買うたら賭けて見たくなり 裏づけがジッと私の眼を見てる クラークさん観光客にもアンビシャス 六感がしびれて街の灯に討たれ 悪の芽を母六感で摘んだ腕 六感のお蔭で帰り怪我をせず 六感が勝手な時は湧く妻で 九官鳥も高らかに鳴くコマーシ コンピューター第六感に追っ

つけず

風珠

かずを 弥山人

+ 12

頂留子 千万子 美佐女 楽

> CMに出る老優にある重み コマーシャル又のせられた市場籠 高見山コマーシャルでは軽く見え 暴走族がゴキブリになるコマーシャル 老いゆけど両の掌活きてい コマーシャルあれを買ってと子がねだる コマーシャルさもうまそうに飲んでいる 東大阪川柳同好会 3 斉藤三 千代子 三十四 -四報 134 美 白 君 f

よいくふう浮ばぬままに負けがこみ 肩書がくるくる変る人生さ 銅像になってもハチ公待ちつづけ 意志どうり 人生も半ばクールな恋一つ クールにもなれず老後を思案する 夫婦喧嘩子供のクールな目が裁く 円周をくるくる駆けてる人生よ 未来図へくるくる回る夫婦独楽 そくりのくふうもしてる市場篭 南大阪川柳会 動かす指にあるくふう 中川 滋雀報 白節柳洋君酔 雀踊子 文酔右秋儀鎮良 子 子 伸 12 秋

近郎

12

60

保険きく入れ歯の奥がかみ合わず川柳しんぐう 困ったことに人間に口がある 口々に言うから雑音として消 紅落とす口から漏れる子守 敬老の日も雑巾を縫うている 肩叩くわが子のような廻り椅子 椅子引けばすっかり奴隷の顔になる 還らない子の椅子ひとつあけておく あいた椅子行けば帽子がそりかえり 回り椅子他人を泣かせて来たきしみ 無理矢理にいやな保険をすすめられ 死に力入れて勧誘する保険 折角の寿命保険に縮められ 火事の声保険の額がふとよぎり 空白のページにくすぶっている火種 食い物に眼がない割にやせている 食い物の中に風土記ちゃんとある 七三で食べ物のよい旅を選る 雑巾になって最後を飾る布 雑巾の役に徹して五十年 雑巾を両手で絞る全快日 貧乏性まだ雑巾にするつもり くすぶらす煙草の中にひそむ悪 洛選のくすぶり違反つきまとい 文字に結んで核を考える 百いことはなかった父の過去 白い本が迷わす置きどころ つきかぬふりして深い仲とす口から漏れる子守唄 いはずですあんた勝って居る い深さをはかるわらい声 える 渓水報 雀踊子 八千代 渓 千代三 凡九郎 柳宏子 あいき 滋悦喜 民 澄

bu

引き初めの鉾より高い雲の峰

子守唄歌えば髪を引っぱられ

家計簿は引き算ばかりでまた赤字

国引きの神は領土に欲がなく

太い眉引いて舞台の顔になり 引く赤の凧絵は志功調の赤

ハンサムな素顔であったどじょう掬

駒つなぎ川柳会

里

とよ子 まさ子 テルミ 武 孝 輪郎郎子 八月の不知火炎える鎮魂歌 絵日記に子の八月が満ちている 鎮魂歌の中で八月また暮れる 八月の汗をカレーで吹っとばし 閉店のあと屋上でまだ稼ぎ

鈍感な蜻蛉寝ござの僕 い話をさがしてゆく見舞 V

戦中派みんな八月誕生日

家県忌造花も欲し

撮る方へ廻って旅行高うつき 少女が脱皮はじめる夏の海

れ舞のように揺れてる花菖蒲

柳柳鎮史儀善憲 太彦好一信祐

年一度団扇で拝む大文字

小路報 飛 和求三俊遊水美芳 柳宏子 白渓子 鳥 芽求三 あわてもの三月に早や鯉のぼり あわて者ニックネームと知らず呼び 八月はいっそ気楽な独り者 夏休み終って虫篭放り出され あの声は去年に逃げた鈴虫か 虫干しにロマン知ってる訪問着 台風の季節も過ぎて稲実る あわてもの近道すれば行きどまり あわてもの火事だと言えば枕だけ 都市砂漠広場に刃物落ちている 八月の風を袂に飛ぶ単車 八月の蟻はラッシュへ我慢する 八月の喪服とにかく暑すぎる 台風のハンドル神にまかせ寝る 八月は顔触れ変わる通勤車 富田林富柳会

板尾

岳人報

射月芳

浜っ子

郎風

健康が母を強気にしてくれる

星になる花火夜空が燃えている

灯を消して今日の別れをふり返る

裏を合わせて馬鹿になる心算り

失恋の酒量は知らぬキューピット だめを押すように残暑の陽がきびし 九月まで持ち越しそうななまけぐ 気がつけば罠にはまっていた酒量 裏切りの手におしぼりが白すぎる 広場で売られてる傷だらけのりん。 一ッ八のジンクスくずせない家業 一学期がもうそこにくる子の陽やけ 文 酔小柳恒規 內路伸明風 文 凡九郎 頂留子 育桐 健 美 司代 F 袁

お詫び

社宛お申出で下さい。 かけしました。深くお詫び致します。 ご希望の方はお取替え致しますので本 本誌11月号に乱丁 があり、 ご迷惑をお

社

柳

きみ江 為之助 Z

61

美佐子

義理ひとつ老母の財布に重い 灯を慕う虫がぶつかる窓ガラス 谷間から煙どこかの落武者か もう仮面いらぬ心で立つ墓前 鉄橋に秋のこだまが棲んでいる 急用の時にはきっちり居ない人 露草にありし日のときめきを見る 五ツ子のひとりパパ似という短気 締切の原稿吐息まじりで呑むコーヒー 急用で戻れば見慣れぬ靴があり 急用がじだんだしてる話中 観念の吐息快心の笑みとなる 日の丸を振ると憂国論になる 吊橋が揺れると谷間が口を開け 反戦の叫びざくろも縦に割れ 自分から起きた喧嘩と知らずくる ガラスの破片に突き刺してきたハー 磨りガラス女は足を伸ばしてる 気の重い会議が急用捜してる 背信の夫の嘘がにくめない 夏に縫う父の甚平はあわてもの あわてもの告別式は準備中 昆虫に夏休みと言う恐怖 台風へ科学がそっぽ向く予算 ジェーン台風女はそれほど恐くない 虫の音にいらだつ心もふと途切 台風はいやな処で首を曲げ の音を明け方まで聞く不眠 Ш 柳ねやがわ 日も 症 12 博泉報き 柳小好琴一 宏子路子音念 亜也子 博酔亜 てまり 岳花美庄太郎人梢代郎 亜野 野一生途

三千子 泉 17 星月夜モンローその他語り合う 潮騒を耳にお前を妻と呼ぶ これからに自信の持てぬ戦中派

なんでもが急用秒針は止まらない今日も又ビルの谷間に消えるパパ シナリオを柩の中で書き終る あるまじきことはある谷間の時間帯 ガラス張り古い金魚にある平和 オーエスケー川柳会

番組を一人二役して埋める敵味方ならぶ墓あり嵯峨の里彼岸花派手に咲いてる無縁墓 努力した結果の墓穴だ受けて立つ やりくりが上手で警戒されている 形 水紫形凡清晴シ右 れ を 水郎香風子近

泉扇地坊夢水仙郎

好

墓墓墓墓出口が判らない 秋深む岸にボートを裏返し 初着から墓まで商社売りたくて 支払いの目安がついて金を借り やりくりをしてる笑顔が悲しすぎ やりくりに慣れて貧乏気にかけず 墓碑よりも句碑にしてくれこれ倅 米亜 亜也子 有博一聖幸千形入

登

貧乏に生まれて星に近く住む 鉄棒の逆立ちから見た秋の空 着せ替えて又着せ替えて披露宴 珈琲屋で米の値段は考えぬ 耳鳴りが止まず手紙を焼き捨てる 菜の花句会 高杉 鬼遊報

悦

郎

やりくりで株価維持するとこもある

蔵成

公射秋美弥 月 芳美幸生

戦傷の耳鬼籍まで鳴りつづけ

尼崎いくしま川柳会

ひく音に心も夜が明ける の騒音やまぬ夜明けどき 鳥進路乱れず島を去る

泳ぐのが苦手で島を出てゆかぬ赤とんぼの早さで秋がやって来る 死にぎわを桜の花とする宴 その夜から耳に木枯し鳴りやまぬ 釈迦の耳億の悩みを聞いている 橋がつく島はそろばんはじいてる

秋深し雑木林は母想い 秋まつり黙々と焼くたこ焼屋 お別れの宴で涙に栓をする

婦唱夫随まねる息子に腹を立て 便利ですマーマーマーと言う言葉 父さんの出た大学も地図のうち 裏切りも笑って叱る楽隠居 猥褻かそ知らぬ態で見てしまい 虹川柳倶楽部 新岡回天子報

洋装の売場で男腕を拱む

限度など通り越してる暴走族 鈴虫の声にはずせぬ簾一つ 蜜蜂となって蓮げの野に遊び 福祉後退をすなと老いの赤い旗 大学の教授要所はカタカナで 寝たきりへ市民が見舞う敬老日

今日もまた夜明けを歩く足だめし 地球脱出星になりたい夜もある ハ貞保中伊和 マ ア ス子蔵石郎子 回虹勝掬久義正千一四素 天 仁 子汀一治於美敏代竿郎石 竿郎石

鎮柳雀糸健シ勝昭善綾 頭 彦伸子葉司子美子紫珠 岳鎮柳

-62

私はグウタラママが羨 指切りで情にもろい風と会う 秋風と共に一つの愛終る 逢いにゆく日がにくいほど晴 スクラムをとけばひとりの風になる 隙間風心のゆるみのぞかれる り向 くと別れがつらい風になる のような母をかき 首相のお顔 品めない 公まし れている 幸郁牧 玉唯紫潮弥千ま

禁煙を言い出してからけむたがり 空想の視野を横切る赤とんぼ わく雲に私の時間が戻らない 北川柳会

弘生報

逮捕者のニュースは知らぬ留置場 寝転んで海の向こうのニュース聞

番

郎

佳

句

地

かすみ

晴

人世の墓場と知らず勇み足

ポスターの紅葉が赤い手で底がない勘忍袋を母は持つ 嵯峨訪えば紅葉と菊で秋が暮れ 妻のあと景品のようについてゆき 廃線の駅釜めしの味も思い出に 釜めしの釜にいけられ萩ゆれる ワインでも駄目かと主治医へ念を押し めしに四季の彩り の紅葉が赤い手で招く

> 千世子 はつ絵

迷うてその辺の地理みな覚え 花が咲き 登志代 テルミ

仙人掌に似ず四国道で話をする

弱々しい れば殺気立ち 日本の地図を少し

ブルトー

片言も言えぬに菓子の味を知

星

朝寝坊夕日ば

かりを詩によむ

満津子

敬老の日は漫才でい 一心寺住 の女の残像がある紅芙蓉 レクション値段に限度などはな いじめられ

株暴落庶民に縁のないニュー 特ダネを抱いた男が黙ってい 旅の空故郷のニュース気にかかり 独り言言うてよだれがぼつり落ち どんぐりのひとり言聞 ちっぽけなニュースに尾がつき鰭が生え 年寄りのひとり言かとほっとかれ ひとりごと聞 く者もいない老父の独 り言 司の道

盛り場の風をなかなか抜けられず 遍路道野分けの風に秋も暮れ あかぎれの指で茶柱つまみ上げ 茶柱を倒さぬように茶をすすり 茶柱が立って今朝の軽い靴 茶柱を信じてスキップで出かけ 茶柱に元気を出せと励まされ

幽七重水

玉秋哲

採石場の対 賞状の以下同文は軽く見え 鳩胸を押しつけられて満員車 言れ萩風情は掃かぬことにする一域を菊と桜にだけ認め い品買えば単価に万が にた川柳会 飲んだ元気で脱ぐ女 跡にも秋を知らす花 西村

> 母と子 ハシゴから上は枝もつ足がかり 袖の下へ心の貧しさが負け の馬子 の虹は樹海をひとっとび が泣かせている舞台 出さ te

和子女

井上柳五郎報

賽銭へ小銭を指で選って居る

寿雄巡 美子々歩

三十四 婦美子 そとえ

倫

瓢々と来て一 弱点をつかれ出口のないあせり 十月の梨歯にしみて 剃り頃を心得ている蒸しタオル 嘘でかためた女が沈む深い淵 走また男の齢があせるだけ 宿の箸を割る 悔 い多し

本の心を守る辻地蔵 岸和田川柳会

桂恒和照

佐加恵

風

植山

吻朗

武助報

10 選 前 月 号 か b

男 選

空振 真夜 こんな時気さくにさよなら言えたなら 爼 すばらしい出逢いは仮面もってない え 更 板 心 LI 榼 中の 4) 10 を て 加 T え ŧ 减 0 (い な あ どこかが起 る ぼ 10 b か るさと笑って世を渡り とき пŊ n い n ば 試 17 C T 鯉 4 ば は 息 ょ n 曲 両 きてる街の音 先 0 1) 耳聞 る T 根 取 釘 せられ 11 えなな が 0 り乱し る 意 地 LI 4) つぎお 頂留子 静 水 郎 醉

-苗報

登美也

fili

久米雄

十五夜の兎童話が消えて行く開店へ早朝からの長い列 早朝のホテルのお湯で政治論早朝のパトサイレンが夢破る朝寝する妻の健康そうな顔 **十五夜の童話を孫に否定され** 戸締りをためらいさせるいい を訪うて来た十五夜の無人駅 い月 夜

食欲の秋減量が邪魔をする 頂上を目指す男はあせらない お彼岸に灯油値上げの記事があり その仕草育ちのよさの大らかさ 年頃の子を持つ親の低い腰 嫁に似た所作でも孫は愛くるし 会話する輪から外れて停年期 熟年のつもりを座席ゆずられる 意地強い女不幸な男運 る蟬吾も老兵がんばれよ

射月芳

定年の余白をうめる手彫趣味

さよう

おだてても舞わない人に困り果て おだてられ安請け合いの向う傷 家付きの祖母がまだ居る倉の鍵 倒産は金庫の鍵が知っていた 現代ッ子おだてのきかぬニヒリスト ワンカップ空瓶秋の花匂う 腐っても鯛家柄で選ばれる ワンカップ闘いすんだ父の背な 席に初めて坐る喜寿の母 ッ子の首で跳ねてる部屋の鍵

久美雄 多津老

売店の隅に鳩笛売れ残り

隣席と趣味が溶け合う旅楽し 同調も出来ぬおだてに押し黙る ワンカップ政治も語る面白さ 下積みの愚痴を聞いてるワンカッ 直実を選び眼鏡の度がきつい の子心を開く鍵がな

五十年生きて人間むつかしい 目の合図出かけた言葉しまい込み 天分もあるが努力で光る玉 見えぬ糸からめて出来た夫婦花 相槌と同意求める旗の色 欲得が絡んで商談響まらず 川柳大阪 汐時を攫むおだてに乗るとする 出

> 比呂志 ひろ子

世界人

民治郎

ええ線が出たと電話のべ 夏楽し美人の線の柔かし 陸橋の向うに恋が待ってい 千代の富士綱の重みをどう仕切る ふところも涼しくなって夏終る 夫婦城ここ一番の手をつなぎ 青春が蠢く戦友から電話 盲目の女を落とす甘い罠 12 から 鳴り

おだてても親爺の海のさわりだけ

いずも川柳会

草丘報

富志子

U 春

もめ事に傍観者でいる卑屈 七十はまだ六合目老いの坂

与洛 善 三十四 志 酔 紫 四

子守唄涙をふいてくださいな家一歩出ればお金もついて出る 売店で仁丹買った一人ぼち び込んでにらみかえしてくる蛙 京都塔の 松川

だてられ正直者の渡る様

杜的報 花代子

> センスには自信を持っている無口 それとなく生年月日きいている

登志代

町に江戸の名残りが落ちている

つつましく飾り人目を引くセン

ス

町に育って大のうどん好き

掟など知らぬ子供が罪おかすあめつちの掟自然にさからわず **掟悲し吊皮同じ方に揺** 樹齢四百年幾万の蟬鳴かせしや 指切りが果せず指に責められる 引け目等ないジーパンの里帰り 旅馴れて線香花火の子を抱き

行列をバイトで揃えて城まつり パチンコへ妻と出かける宿の下駄 虫の音も聞こえず古城陽が沈む お荷物にならぬ程度に老後生き **蜃気楼ゆるい絵具を溶いている** 川柳わかやま 堀端

喜 敏 酔峰

無実なら黙秘権などいるまいに 清と濁怪 意識した言葉で一線引いている 肩書を捨て下町に溶けている 落書のセンス抜群である僧さ ボールペン怪しい文字は書きません しく変わる海のいろ

抜群のセンスやりくりつけている インテリア娘のセンスで丸く住む 晩酌の夫の無口が怪しまれ 浅草で履く白足袋の祭り好き 住む人のセンスが匂う門に立つ 道

弘 笑 本 君 生 風 棒 枝

みつる人

道酔軒弘笑

白善三稚 光 大 太 男 代 三稚き光男代み代 喜美子 夫

克武男 紀美女 雄

タイ緩めそっと退社の秒を読む 三飛白潮水俊白弘笛杜美芳和求求鳥子花客三李之珠的子子友芽

1L

洛酔報

緑之助

代仕男

fili

-64

炎天下歩幅確かな蟻の列 横道を行く蟻もいるオレに似て 従いてゆく蟻は一日歩くだけ 車座の笑いの中に昇る月 月が出て涙をさそう事故現場 あれからの二人を月に問うも野幕 玉砕を知ってる南十字星 世の中でたった一つの星に逢い まばたきをして見失う母の星 星占いにこって自分を見失い 信頼をした瞳が縋る聴診器 新学期まだ残ってる歯の治療 倖せは生きるだけなりジンべ着る 女とは哀しきものよ適齢期 商売の笑顔も落とす仕舞い風呂 事故跡のむなしく光るガラス玉 封筒の中身が見たいのも女 鍵の数納得いかぬ型もあ 下町の風人間の臭いする 陰になり日向になって怪 石けんがつくる女の園があり すれ違う蟻は無駄口喋らない 信用をされて口紅薄くする 紫の花仏壇にさびしすぎ 信用が少し落ちてる三代目 妻の愛程よい糊のシャツを着る ふるさとの土の匂いのする便り 一三日妻が主権でいる実家 町に開けっぴろげの唄がある 川柳ささやま しまれ 河原みのる報 松風 素水のる くにの ゆきお ゆう也 柊 松節 登弘天竹広菊康 か平 珠 子風 舟生九萌風野子吉 空振りのバットだらりと苦笑い 話上手踊る格好して語り 年老いし母が自慢の糸切り歯 食卓を囲みカロリー論しきり うすあかり一輪すでに目をさまし 雷が天地も裂けよと腹を立て 手も足もあずけて日本踊らされ ステテコで踊った写真が届いたの 空振りも時に笑って世を渡り ピエロにもなってこぼれる酒に酔う 雷を落とす親父のいない家 歯切れよさ嫁になったらもてあまし 歯に衣を着せぬ言い方で嫌われる 歯を入れて他人のような味をかみ 這い這いが出来て食卓落着かず ゴキブリの直感主人はお人好し 直感に頼り推理がボケてくる 直感へ言い訳みじめな差し向い 直感が外れてまずい酒を酌む 縁結びで女神は反対票を入れ 勝利の女神逆転劇にいそがしい 目に見えぬ仕合せもっている女神 石けんを確めあっている包 一泊の旅早くから起される 泊の旅でとびとび見る名所 軍が空まわりしている政治 には歯を眼には眼を剝く大と猿 用と嵩で石けん熨斗 柳こそ命の洗濯する石けん わかあゆ川柳会 柳塔まつえ

保夢江水穂夢明み 錆びついた鎖が過去を索いてくる 約束を果して広い広い海 秋を愛して詩人となる私 老眼鏡かける視野には過去ばかり

花愛す人に悲しい花盗人

白汀報 タケノ

ストレスは酒に溶かして吞むと良し

比呂子

芳 枝 寿美子 与根一 登美也 舞快叮愚

早

苗

空振りも覚悟している土踏まず 里芋の露真珠としておどる 空振りで終る人生へ莞爾たり 振り上げた拳当らぬように振 香煙の中に雷の 声を聴き

美智子

百合子

独り寝のロマンまさぐる時刻表 号令へみな一色となる強さ 雰囲気が好きでボトルの詩をつづる サギ草の情緒を犯してはならぬ 愛の余韻男はぬるい湯につかる 霧の幻想女体とみしは滝の無垢 右むいて左をむいてまた迷い 海しんしん海がひとり言を言う 母の背の丸さへ詫びる事ばかり なまけぐせひっこめひっこめ新学期 私の静けさヘセンチになる私 結局は自分が頼り模擬テスト 称名のほかなし句集に灯を捧ぐ つぎつぎに友失うている酒で ふつふつと句集めくればよぎるもの 一波踊り売った買ったの修羅場の手 川柳たけはら 房上四仁昭 小六紀 中三愛 菁居報 貞鬼子焼 か 菁 蘭 秀 不 節 政 笑 静 つ こ 居 幸 水 朽 夫 己 子 火 芳は美歳清 る 枝み栄栄泉 静 白

哉紅童子朗草希和丸

◆訂正お詫び 日増とあるは円増の誤りにつき訂正。 前号水煙抄作品中の作者名、

募 集・

内

★原稿は四百字詰原稿用 字は楷書で新かなづかいにしてください。 赤 П 村多

婦 頂 村

紙

に四枚以内

文

JII 題 柳 帖 抄 塔

0) ち 吟 (3句 10 各題5句以 10 句 橘 IE. 鈴 14

二月号発表 12 月 15 H 締

切

.

本 尾 薫 水 風 栞 選 選

柳

愛 水 JII

高 本

薰

課

美子 7 選 選

H 木

留 諷

手: 石 父 題 煙 腕 14 抄 吟 帖 各題 (3句 10 句 5句以内 橘 IF.

★用紙はなるべく柳箋をご使用くださ 柳塔欄の投句は本社同 横 清 梅 谿 地 野 庵 人に限ります 不 7 西华 風

選 選

三月号発表 塔 10 句 儿 (1月15 尾 締 切

風 栞 選 選 選

水

12月の常任理事会は1日5時から

選

₹545 大阪 印発福 発行所 剧行集 所人兼

> 藤 中

原島

童 蓬

心太

社 郎

市阿倍野区三明町二一一〇一 ウエムラ第2ビル202号室 JII (0六)六二九十 柳

座大阪,三三三六八番

昭昭 和和 44 年年 Ti.Ti. 分 分 価 ハハ 六 \overline{A} 百 三 円 月月 百百 円円 料45 日日 (送料共 送料共 円 発印

本社12月句会

会席 費題

三百円題

当日発表

決 沂

題

音

場時

会 日

公時

月七 電話 271:2 百 後

岩河河 橘 各題三句以内厳守 城橋下 3 本 内 9 町 雀 君 3 車 10 笑 東スグ 風 5 抽 選

★投句は柳箋に一葉一題、郵券200円 同封のこと。

> JII 柳

塔

社

は

様 選

何

を

h 12

儲ける 雑 煮 1月の兼題 盃 犬

本社1月句会は7日休

お

剛 カ

19

す

3 ヤ

3店に共通です 一〇〇円から 贈物 かっ



大阪・なんば 東京・日本橋 £ 小

と存 か b 商 た か 品 す か

生力

肉体疲労時のVB、補給に

アリナミ ン A 25の 効能= 肉体疲労時・病中病後・妊娠投 乳側のビタミンBi補給、神経痛・腰痛・筋肉痛・ 肩こりの緩和、脚気。☆説明書をよく読んで 正しくお使いください。 壹くわしくは医師、 薬剤師、薬局、薬用にご相談ください。 武田薬品工業株式会社 〒541 大阪市東区道修町2-27

ふと雑餉隈・

下ほんまの夢物語。

浮び、誰でも読め

誰でも読めるかなと

()プロ

コルフ

7

いる。

九戦五勝とは

(300

t

ま・わいふ) ここで

大したものだと思う。

▼来年五月には川 百号を迎える。 柳塔に改

> 三人三脚 発行される。 江正朗・芳子夫妻の れてご不自 来年に大いに おられるご様子だ。 れたのも朗報の 一曲な手 が近日本社 い期待を の遠出 ルは死 た伊 万強くなるのだが。 物 地方にも、 13 ケル

Vの今

心いと共に一最後の一思

お届け

する。

を 離

cz

を試みら

0

年夫さ 感謝

編

時に別れを告げた

から 集▼ か

早く遠くへ

、過ぎ去っ

召▼の響し皆炬を

煙で味読をお 呼ぶに違いない。

様、

人の工氏と柳談をかわす。 語を残した人物である。 は、お馴染の景行帝の皇子 。弟橘姫や草蘿剣の物の熊襲、東北の蝦夷を どうか風邪などを 前の国定教科書で 記紀伝承上の英 (やまとたける 隈府の文字が お願いする F社同 (強 新春 変り、 綾が いる。 和もすでに半世紀を過ぎて何時までも大正でない。昭 けて と思われる方。微妙なこのなかなか省略された言葉だ どうも…… !」「高杉です」「どうも 杉です」「吉田 , のである。 いるように思わ と思われる方、 現代川 若者は時 表層は刻々とうつり 柳 この返答を 言んですか の脱皮を妨 1 れる。 いや、 れに乗

はず

雄で、戦前のみこと

日本武尊

ませぬように。

九州

ーに倉本昌 ☆川柳にいのす 人がいる。コ う人がいる。 のかを考えてみる。 大切なよう のちをか であ ぎないとい 川柳は趣味 何に当る けると き 11

釈

では、 のであ のであ の お 一面とな い川て柳 か× 迦に問うた。 ことだ」と答え 番 Ł 釈迦は

2

さひろがるお買物

大きな反 20 **慶、白鳥慶がある。** 曳野市古市には日本 があるよう 4

休み 5 1 した所 本拠地、 の限、 登場する。 では 東北では、 雑餉隈は、 ないか 隈府が と彼 まくなるには球を打つより 柳とは りを多くすることだ」

似ても似つかぬ

よりも努力が

いる。

ゴル

-

じり、 に惚れていることにお が私には一番困る前はどちらだと問わ ☆前者は後者を不 かねな 後者は前者を気狂い は最もむずかいことはぶことだ」と答えた。 101 たずねると「やっぱり遊ぶ 合釈迦の高弟が或る時、 恋も、 である。 恋も恋なら、 それ いことは 人間にとって はそ いことは それで育ったわむれ それは遊 た 何です とい

不思議なる時の技と 精妙なる手の技がくみしあい ここにひとつの芸を見せる。



一陶然たる名人芸。サントリーオールド

標準的な小売価格2,770円/製造・販売 サントリー株式会社

